

人生に根柢を置かず、文學の眞義に遠ざかれるを痛切に深刻に叫ぶものであつた。舊思想を打破し舊套を破毀しようとする努力であつた。幻影や空想やこゝに消滅して、現實の慘憺たる事相を親睹する絶望となり無目的とならざるを得ない、人生は所詮無解決のもの、それに解決を與へるのは一の遊戯に過ぎないといふのであつた。かういふ主張は三十九から四十年へかけて隨所に見られた。この破壊につゞくに破壊を以てせる反抗的態度は、やがて新に建設せらるべき文學の素地を掃ひ清めるもの、怒號の聲の高かつたのも當然といはねばならぬ。

四十一年の一月「早稻田文學」は東西の事例により、理論から、また歴史から、自然主義の本體を論じた。かく明確にその概念を説いたものは、從來かつて見なかつた所である。島村抱月は「文藝上の自然主義」と題して、まづ筆を日本の自然主義に起して、歐洲に於けるクラシシズム・ロマンチズム及び自然主義の消長を説き、寫實主義と自然主義との區別に及び、さて自然主義の描寫の目的題材に就いて説をなしてはいはく、「寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ、理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義は獨り眞を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命であり、モットーである。自然主義から言はすれば、理想といひ、現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にし

か立たない。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の選擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。なまなか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奥な自然の味に觸れ得ない。是等の上に立つて第一義の標的となる者は眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。然らば、かやうな第一義の眞は、たゞ深い高いといふだけで、明かに手に取ることは出來ないのであらうか。これと第二義の理想、現實などいふものとの干繋は如何。之に對する答は、やがて自然主義の題材論である」と。かくて題材は社會問題と連り、個人主義と連り、根本道德問題に入る、これ自然主義が近代的傳習破壊的である結果であつた。また自然主義が自然といふことから、現實に連り、科學に連り、科學は心理學、生理學、進化論、現實は現實として寫すために一切人工虚飾の分子を擺脫しようとして、赤裸々なる人間野性醜を採るといふのであつた。

これと共に、相馬御風はモウバサンの自然主義、中村星湖はゾラの自然主義、片上天弦はフローベルの自然主義を論じ、白松南山は哲學上の自然主義として、ブラグマチズムを論じた。從來自然主義のために東道であつた「早稻田文學」は、こゝにその主義宣傳の中堅となつた。もと自然主義のために努力せるものに花袋があり、天溪があり、泡鳴があり、生田長江があつたけれど、正而から正々堂々と建設の意を以て立つたものは抱



月であつた。泡鳴の活動も亦目ざましいものがあつた。全人的努力を以て藝術即人生を論じ、大膽な自己中心思想の新人生觀を以て新自然主義と稱して評論壇上を闊歩した。

その五月、抱月は更に『自然主義の價值如何』に就いて論じた。自然主義は凡そ三段に於いて一般思想と連なる。因習破壊、新機軸發揮といふ點に於いて、文藝は文藝の範圍で之を行ひ、道德は道德の範圍で之を行ふが、根本は一貫した思想の傾向である。之を第一段の連絡といふ。また一般思想が科學を重んじ、經驗を重んずると同じく、文藝も現實を重んじて所謂理想を斥ける、之を第二段の連絡といふ。そして、吾人は之に更に第三段を加へて、直ちに絶對神祕の一物を指し、中間の説明を以て満足せざらんとする宗教的傾向を、これ亦一般思想が既成宗教から去つて求めんとする所あるに合期すると見る。そして是等の中心意義は、絶對最上の一物を理想に求めるものが、偏に上に向つて終に人生を超越せんとするに反對して、下に向はんとする思想である。現實の中に直ちに絶對を見んとする東洋的傾向である。この第三段の境こそ美の最高所、生の本體である。

かく一面に主張の言明があり、一面にまた作家の活動も起つて、自然主義の勢力は

愈々盛になつて行つた。今はすべての評論は藝術對人生の根本問題に觸れないものはないやうになつた。生活の悲哀、生活の情味に就いても論ぜられるに至つた。天溪はさきに『現實暴露の悲哀』について説いたが、更に『悲哀の三相』に於いて、十九世紀の文藝は自我本位、而もそれから溢れ出でた自然の聲は悲哀である事をいひ、また十九世紀初期の文藝に發した悲哀は自我發展の悲哀、寫實派文學の全盛時代のは自我勝利の悲哀にして、現代文藝のは自覺の悲哀であると斷じた。金子筑水は生活の情味は悲哀、快樂といふ如き單調なものではなくて、複雑多趣を籠めてゐる。この生活の情味は生活の刺激者であると共に完成者である。故に及ぶ限り廣く且深く斯かる情味を経験するが吾人の本望、また至願である。之を味ふことが深ければ深いほど益々人生を味ふ所以であると説いた。

自然主義がこゝまで進んだ時に、大いに之に向つて反抗を企て、その殲滅を期するものも少なくなかつた。その雄將ともいふべきものは後藤宙外であつた。宙外は自然主義に對して、その無目的無理想を難じ、悲哀痛苦が藝術の根柢をなすの非を論じ、天溪の『自然主義』及び泡鳴の『新自然主義』の著書に對して、『非自然主義』を著はして大いに奮闘した。翌年に至つては更に社會的活動を起さうとして、登張竹風と共に文藝革新會



を起して呼號する所があつた。されど、その効果は少なかつた。樋口龍峽もまた倫理學の見地に立つて之を難じ、田中喜一も亦具體理想主義の上に立つて之を非難した。されど如何せん大勢はつひに自然主義に傾いて、それらが幾多の奮勵も更に何等の効が無かつた。

その主張言明の任務を果した自然主義の評論界は、その聲を潛めて靜かに自己を考察し批評し反省する態度を取るに至つた。嚴肅なる態度は愈加はつた。藝術と實人生の問題、觀照と實行との問題も起つた。藝術批評は一轉して、こゝに人生の批評となつた。その傾向の最も鮮明に見られたのは四十二年の狀態である。

藝術と實人生とを比較する時に實人生を本位とする社會論的見地からするものと、文藝はまた文藝そのものとして見るべしといふ藝術的見地からするものとの別が生じた。自然主義はかくして分割點を見出し、現實描寫の論は發展して觀照の論となつた。觀照があつて始めて自然主義の作品は出づる。觀照の世界は即ち藝術の世界であるといはれた。そして論點はこゝにも亦生じた。觀照とは實生活の一部、それが全生活とは如何なる差を有するかと。この間が即ち觀照對實行の論題であつた。四十二年の五月、或者は印象批評を説き、或者は人生に對する知性批評と感性批評を説き、或者

は近世文壇に於ける評論の價値に就いて論じて、批評の態度の論議の喧かつた時、抱月は觀照即ち人生のためなる事を論じてより、筑水の藝術と實人生との接觸點の論となり、徳田秋江の藝術は人生の理想化なりとの論となり、龍峽の現實と人生との論となり、また抱月の第一義と第二義の論となり、更に宙外の人生と文藝の論、御風の自然主義最後の試練の論となつた。すでにして、抱月はまた懷疑と告白との論をなして、懷疑の人生觀の告白をした。論壇はこれによつて更に動搖を加へた。

四十三年に至つては、評論壇の趨勢は愈紛亂を極めるに至つた。前年の末頃から、小宮豊隆、安倍能成等の青年批評家が雑誌「ホトトギス」に據り、「朝日新聞」に據つて、活躍をはじめた。それがこの年に入つては、各、新ロマンチズムを説き、主觀の解放を説いた。自然主義論者の中からも亦主客觀の一致を説き、主觀の重んずべきを説くに至つた。要するに、全體の色調の上に於いて、著しい變易が見られた。

能成は自然主義に於ける浪漫的傾向を論じた。ひとり此論文のみではない。新ロマンチズムについて説くものは、自然主義を以てロマンチズムの反抗と見、その特色を外的物的、自然的なりとし、この傾向は永續すべきものでない、更に再びロマンチズムの本流に歸るべきことを説いた。これに對して、自然派からは、自然主義はその發



生の當初からロマンチックの傾向を多く有してゐた、即ちロマンチズムの反抗ではなくて連鎖であると見るのであつた。されど、兎に角新ロマンチズムまた新理想派に關する論議は、次第に強みを加へて來た。この趨勢は更に續いて四十四年にまで及んだ。

これに次ぐ四十五年には評論界はいたく沈滞した。二三の論議をなすものはないでもなかつたが、多くは口を緘して叫ばなかつた。已に開拓を了して種藝を創作界に譲るといふ態度があつた。自然主義を行き盡すまで行かして、わが功成れりといふ概があつた。されど、評論界の不振は、外に向つて新しい態度を主張した鋭鋒を自己に擬して、自己を研究し解剖するに力めた爲でもあつた。最早や徒に新主義を鼓吹し新思想を呼號することが出來なくなつた。新傾向の藝術も亦更に小く狭く鋭い主觀の上に立てられようとするものであつた。此に於いてか、思想界のすべては、生氣なく活氣なく、惰氣と壞類とに包まれてゐたと見ることが出来る。しかも壞類の裏面には世間一般のものよりも更に大いに更に高きものを求めようとする努力が潜んでゐた。さもあらばあれ、一たび小い狭い主觀の間に囚へられた評論界は、未だその求める新生面を開拓する事を得ないで、早くも明治と別れたのである。

之を要するに、この期に至つて評論界は眞の意味に於いて文壇の勢力をなし、しかもその評論界は自然主義のために終始するものであつた。評論の勢力はたゞに文界にのみ止まらず、廣く社會の全般にまでも及んだ。社會と文藝とはかくして接觸しかくして文藝院設立問題は議せられ、その結果として文藝委員會は四十四年五月文部省内に創設せられ、鷗外蘇峯露伴醒雪小波青々園桂月篁村敏抱月及び上田萬年芳賀矢一藤代禎輔姊崎正治塚原靖足立荒人の十六人が委員に任命せられた。かゝる出來事は實に空前のものといはねばならない。



## 第二章 自然主義派の小説

三十九年三月、島崎藤村は七年の久しい間隠退せる北信の地から出でて、長篇小説『破戒』を出版した。これよりさき『水彩畫家』、『爺』、『藥草履』等の詩趣深い數種の短篇を草して稍、文壇に矚目せられた人の作は、たゞに自費出版といふこと以外、二年間の勞作といふこと以外、その内容を以て裕に一新時期を劃すべきものであつた。信濃國の飯山の一小學校教員が、その父の遺訓を堅く守つて、穢多であることを秘してゐたが、周圍の事情に迫られて、つひに自ら進んで告白し、こゝにこの偏見を持つる社會から脱し、外國に移住して新しい光明に接しようとするに至る徑路を敘してゐる。或はその主人公の性格があまりに弱きに過ぎて、却つて讀者の同情を滅却する事もあらう。或はその敘述が精細に互るの極、時に冗漫の譏を受ねばならぬものもあらう。然しながら、穢多といふ特殊の種族を題材として個人對社會の衝突を描き、また個人内心の苦悶を直寫した點は、遂に歐洲文藝界に於ける自然派の諸作品と脈を通ずるものでなからうか。また、この作品には、前期に於いて殆ど小説壇を風靡せる戀愛に就いて、敘する所の甚だ少

いことを注意せねばならぬ。さきには戀愛が興味の中心であつた、然るに今は更に大いに更に強い問題の人生に横はつてゐることを知つた。生活の問題がそれである。實にこの作はそれに觸れ得て大なる價値を占めることが出來た。社會に生きんとする個人の深い意志、またそれから生ずる悲壯な葛藤の前には、戀愛はあまりに小なるものであつた。これまた歐洲の新しい文藝と始めて對等の發現を得たとも稱すべきものであつた。顯著な地方色の描出せられてゐる一事も、亦注目せなければならぬ現象である。飯山附近の年中行事や、歳事記のすべては盡くこの一卷中に包含せられ、文藝上の官能主義の特徴も發揮せられて、その印象を鋭く強からしめてゐる。見れば、この作は一として新しい色調を帯びてゐないものはなかつた。

この三月、國木田獨歩の短篇集『運命』も出版せられた。その以前獨歩には『獨歩集』があつた。大膽に眞率に肉慾を描出せる『女難と正直者』の如き、驚きを要求せる『牛肉と馬鈴薯』の如き佳什も、その中にあつた。されど、多くは硯友社一派の絢爛な文辭と對比すべくもあらずとして、默殺せられてゐたが、こゝに『運命』の出づるに及んで、溯つて『獨歩集』も亦喧傳せるれるに至つた。『運命』は殊に作者獨得の感想を獨得の描寫を以て最もよく表現し盡したものといはれた。由來その文辭は精透深刻の趣致を有してゐる



と評せられた。それが自敘體の敘述描寫をなしてゐるので、道勁の筆致は愈、加はらざるを得ない。況んや『運命』の諸篇を通じての思想は、やがて獨歩その人の心裏の全境域を示すものであつた。人は大自然の藥籠中にあつて、如何に泣き叫んでも、それから脱離し得るものでない。悠久にして不思議なる生死を吐吞する大宇宙に面しては、人間は小さい哀れなものである。これがその運命觀であつて、それがまた山と空と水との美を讚歎する自然觀を結びつける。これぞ作者が自らワーズワースアン・ナチ、ラリズムと稱する所以。篇中の空知川の邊は大森林に對する畏怖恐懼を描出して、最もよくこれ等の思想を具體化したものである。

このやうにして、獨歩の作は皆同一様、極言するものは、彼の作は一篇を讀めば他は讀まざるも可讀めば頭痛を覺えるといふものもあつた。これは作者が飽くまでも主觀的作家であるからである。そして、その主觀的傾向は作の様式に自敘體を取り、また縱横に作家の懷抱する所を表現して、無技巧無修飾の脚色文飾の間に一種の力を有せしめる所以であつた。

『破戒』と『運命』とが期せずして小説壇に新氣運を形づくるに至つたが、これによつて寄與せられた事項は何であつたらうか。眞面目に嚴肅な態度で人生の根柢に接觸せ

る態度を第一に數へねばならぬ。作家の主觀即ち胸中の事實をさながら描寫して作家自身の性格を烙きつけようとするのはその二で、小説の人物は必ずしも傑出の士たるを要しない、平凡な性格でも差支ない、要は生に對する苦悶と悲喜とを表現し得るにありとするのがその三であつた。これ等の新しい傾向は、まさに自然主義の標榜する特色と相合するものではなからうか。二作者共に自ら自然主義をば標榜しない、殊に獨歩の如きは、斷然我は自然主義者にあらずとさへ稱したけれど、なほ自然主義の先驅を「なせり」といふべきものであつた。

その作風が漸を以て文壇の中心となり行き、隨つて文藝社會の諸問題が實際に起り來るやうになつたのは四十年の事で、幾多の新しい作家によつて新しい試みが始められた。その中にも、讀否の聲の喧かつたものは田山花袋の『蒲團』であつた。妻子を有する小説家が、自分の家に寄寓する女弟子に心を寄せてゐたが、未だその胸裡を告げないうちに、少女は既に一青年と相愛するに至つた。小説家は怒と妬とに堪へないで、二人の間を割いて、少女を郷里に歸し、その後で少女の蒲團の中に身を投じて、飽くまでもその移り香に煩悶の情を遣るといふのであつた。これは熱烈な中年の戀を示したものであるが、しかも作者の大膽な告白であることが、少なからず文壇を驚かした。これを



縁として性慾描寫の問題が頻りに繰り返された。作者の態度は性慾に對しては斷じて挑發の筆を弄する事をなさなかつた。その肉感に近づき、性慾を顧みるのは、一切に人生を表現しようとするが爲であつた。虚偽を排して素樸の眞に接しようとするのであつた。自然主義の作品は性慾に就いて敘する所の多いのも、その態度は常に皆それであつた。この點に於いても、花袋は自然主義の嚮ふところを實例によつて示した。

四十一年には花袋はまた『一兵卒』を出した。日露の戦役中脚氣に罹つて入院せる兵士が寂寥に堪へないで、未だ全癒せざるに先だち強ひて自ら退院し、再び戦列に就かうとして、行軍中に病氣再發し、つひに衝心して死するに至る心身の苦悶を描いたもので、内面描寫の先驅をなしたものである。然し花袋にしては此の如き作風は異數である、しかもそれがその常に取るところの平面描寫と關聯してゐる。その後に出でた『生』に至つては、全然平面描寫を以て終始してゐた。自らはいふ、これはコンダール一派の作風に準據せるものであると。冷靜な態度、實感的に效果の多い題材を、力めて殺して敘せんとする態度を取つた。その作品から受ける印象は、その總てを透して現はれた人生の姿であることを欲した。さういふ試みは必ずしも成功したものとも思はれなかつたが、しかしよく人生の諸問題を拉へてゐる。死結婚・出産などが、まさまざと現はれてゐる。この傾向は『妻』といふ長篇をその翌年に出すに及んで更に加はつた。こゝに至つては、よく前者に試みて得られなかつたものを完成した。また『田舎教師』を出し、また不遇な青年の生涯を描いて成功した。この頃から花袋の態度は稍、異なつて來たといはれた。それが翌四十三年に於ける大作の評があつた『縁』となつては、前の『生』及び『妻』と共に一種のトリロジーをなすといふに拘らず、それ等とは全然異なる色調を帯びて來た。即ち作者の主觀が所々に散見せられ、また全體に主情主義の風貌を存してゐるといはれる程である。されば、一點の主觀をも交へまいとする平面描寫の態度と、時に背反してゐるかと思はれる節もある。然しながら、その根本義たる作者の主觀が擴大せられて、自然と同一に歸するところに眞の藝術を現するといふことは、依然として存してゐた。これがこの作家の是非せられる所以で、時に失敗の作は徒らに平凡平板に陥る所以であるが、その態度の論を外にして、描寫の手段から見れば、何等の脚色をも設けないうで、よく人生の複雑な状態を直寫する點が、他に求めることの難いものであつた。

花袋の努力は幾多の短篇を出して、その主張するところの平面描寫をなした。『花袋



集に收めてある諸作の如きは、皆種々の點に於いて文壇の注目を惹いたものである。「良」といふ短篇の如きは直に問題を提供した論文的小説である。その新作風はやがて論難の的となつた。かくて花袋の創作は、絶えず自然主義の發展に資することの實に偉大なものであつた。また雜誌「文章世界」に主筆として、青年を指導し、常にその主義のために論述せる努力は忘れらるべきものでない。

花袋と相並んでその作品を比較せられるものは藤村であつた。藤村は不斷の努力を以て幾多の短篇の佳作を出したが、その中でも世評を騒がしたものは「並木」であつた。これも自然主義が如何に現社會に處し現實に觸れようとする傾向あるかを示すものと解することが出来やう。所謂モデル問題がそれである。「並木」は藤村の友人馬場孤蝶、戸川秋骨をモデルになしたことから事實と作品との關係論を起し、更に文藝と道徳との關係論を起すに至つた。されど、大勢は自己の經驗或は見聞を精細に深刻に敘して、空想を却けようとする現今の文藝は、當然斯くあるべきものとして是認した。

花袋が長篇「生」を出した時、殆ど同時に藤村は長篇「春」を出した。これは藤村が自己を描き、また自己の周圍即ち「文學界」同人間に於ける雰圍氣を描かうとしたものである。これには一の纏まつた事件なく思想なく、また主人公として見るべき人物がなかつた。

されど、一種の運動を現はし、氣分を出すことに於いては、成功したものと稱せられた。これを以て「生」と比較するに、「生」は外面から内部に向つての觀察と見るべく、隨つて理智の傾向が多く存して居り、「春」は内部から外面に向つての告白と見るべく、隨つて情緒の活動が多くあつた。花袋が「妻」を出し「縁」を出した時には、藤村は「家」を出し「犠牲」を出した。二家の對照は屢、評家の口に上つた。「家」はまた藤村自身を中心として一家の狀態を描き「犠牲」も亦その續篇として出だされたものである。これにも藤村は氣分を出すことを主としてゐた。しかもこれは「春」の絶對客觀の態度から出でて、主觀的傾向を寓してゐる所のあることが認められる。二作以後の短篇「食後」に載録せる諸篇に殊にこの傾向は明かである。

花袋と藤村とは、その取るところに相違はあるが、要するに人生觀照の一派ともいふべきであらう。暗黒の人生をも藝術として示さうとする離れたところがある。所謂「藝術派」といふもの。この派に對するものは人生派といふべきもので、實感に即するものであつた。前者が佛蘭西文藝の感化の上に立つとせば、後者は露西亞文藝の影響の下に成つたものである。復活せる二葉亭の活動は、後者を代表するものであつた。二葉亭は三十九年に「その面影」を「朝日新聞」に連載し、四十年に「平凡」を連載した。「その



面影』は主人公なる小野哲也が、心中では絶えず實世間に出でて活動せんとを期しながら、何時か周囲の境遇に制せられて人生の岐路に走ることを敍したものの『平凡』は平凡な境遇に成長して漸く文學に進まうとする平凡な性格を描いたもの。これ等はもと二葉亭の懐抱する所の一端を示すに過ぎなかつた。文藝のために人生を觀察するは極力排斥する所であつて、人生のために人生を批評しようとするものであつた。文學上の作品に現はれた自然や人生は、直接に實感し得た所にもせよ、空想で再現せしめた以上、現實に接するが如き切實の感を得るものでないといふのが、作者の意見であつた。こゝに於いて文藝に慥焉たらず常に實世間に活動を期しつゝある苦悶せる此作者の衷情は、二作の中殊に『平凡』に於いて能く見られる。たゞ圓熟せる筆致はその間にも何處にか餘裕を存して、その苦悶を赤裸々に現出することを敢てしなかつた。されば二葉亭としては、作そのものよりも、その露西亞小説の主人公と同一の徑路を有する實歴こそ、更に大なる藝術であつた。

もしそれこゝにその人生派の態度を極點にまで齎し來たものを求めるならば、泡鳴の諸作であらう。それらの作品は概ね實感を唯一の内容としたものである。讀者をして暗澹たる人生の渦中に投ぜずには置くまいとするやうな作であつた。四十二年

の『耽溺』及び四十三年の『放浪』の如きは、その代表の作である。

今やかくの如き別を撤して、廣く現實を主義とする作家を求めるならば、まづその特色の著しいものとして正宗白鳥を挙げねばならぬ。その諸作は長短篇を合はせて『紅葉』、『何處へ』、『白鳥集』、『一家族』、『微光』、『落日』等に載せられてゐる。これ等に通じて描出せられたものは、一種の廢頽的生活である。現實の苦しい桎梏の下に呻吟する運命、希望もなく目的もなく碌々として涸渴の生を送る悲痛である。その人物は戀もなく愛もなく、義もなく、義務も責任をも顧みず、たゞ無意味に日月を送迎するものに過ぎない。その傑作の稱ある『泥人形』は冷笑と皮肉とを以て充たされてゐる。徹底せず充實せざる生活を描き出して、作家が觀照せる人生のすべてを盡くしてゐる。これに對してその主人公の生活の不徹底を責める聲が、批評壇から聞かされた。それを直に移して作生觀に對する非難も起つた。されど、その不徹底な點こそは白鳥の忠者の人實に觀照したところ、作の價値は實にこゝに存してゐるのである。

白鳥と相似た作を出したものは徳田秋聲であつた。その作は短篇の集『秋聲集』に收められ、また『多數者』、『新世帯』等の長篇もあつたが、最も傑出せるものは、四十四年に出した長篇『微』である。その主人公笹村は理想もなく將來もなくたゞ運命に盲從する平凡



の人間に過ぎない。その家庭は何等の意義もなく、たゞ因襲を逐ひ時々の小慾望のため、に遣り上げられたに過ぎない。凡庸の人間が虚弱な身體を擁して意味のない家庭に拘束せられ、こゝに人生の暗愁と廢頽とを現じ來るのであつた。秋聲は明確な印象を刻み行く筆致を以てこれを描いた。評するものは白鳥と比較していふ、若し同一傾向の白鳥を乗り越えることが出來たとすれば、その特長は世故に長けた點に於いて後者よりも廣く材料を有し得られることであらうと。實に秋聲は硯友社派の一人で、早く『春光』の如き作を出して新興文學に連るべき要素を具してゐた。而もそれが藤村や花袋に動かされてその跡を逐ふやうな状態にあつたが、こゝに至つて、その態度を確持し、その熟練な手法を以て此作をなし、遂にかの二者の壘を靡せんとするに至つた。

風葉もまた硯友社の一人として夙に新氣運の上に立つて新しい作風を試みた。それは寧ろ秋聲よりも早くあつた。四十年には長篇『天才』及び『戀さめ』を出し、翌年には『風葉集』の諸作と『世間師』とがあつた。その特色は離れて人生を觀照する態度であつて、しかも描寫の技巧の圓熟は他に類を見ざるものと稱せられた。たゞその圓熟を恃むの果は筆鋒の熟練を以て推されながら、時に空しく考案を缺いて、藝術として重きを置き難いものを出すに至つた。『耽溺』と題して、泡鳴のと同じ名で殆ど同一の題材を取

つた作の如きは、その一例である。

風葉の門から出でたものに眞山青果がある。四十年に『青果集』を出し、四十一年に『奔流』を出した。前者の多くは文明と自然道德と本能などの矛盾に對して、一種深刻な力を以て臨んでゐる。そしてそれに或る解決を求めて未だ到らざるものがある。然るに『奔流』に至つては、前者に缺けてゐた冷靜な觀照が多少加はつて、更に深い強い力を依然として持つてゐる。されど、その多くは情感から得て情感に傳へようとするものである。かれが文壇に特有の地位を占め得た所以はこれである。

小山内薫は數多い短篇を以て才筆の名を知られた。深い觀察があるでもなく、絢爛の文辭があるのでもないが、よく巧妙に全體を纏めて行くところが、この人の特色である。機智に富むといふ言が、之を評して餘蘊なきものであらう。短篇集『窓』があり、『笛』がある。長篇『大河端』に至つては、自ら異なる態度を取つてゐる。

その他、自然主義の作家として現實に即する作品を出した者が甚だ多かつた。生田葵山の如き、中村星湖の如き、佐藤紅綠の如き、水野葉舟の如き、徳田秋江の如き、上司小劍の如きが、それである。これ等も各、多少の特色を具するとはいへ、無技巧、無理想、たゞ現實をさながらに描出し、しようとする努力は同一である。精緻嚴密な態度を以て事象の



眞を觀取し、近代生活の暗黒面を痛切に剔抉しようとしてゐる。在來の習俗を打破して、假面の下に隠れてゐる獸性を暴露しようとしてゐる。日常生活の平凡な事實を脚色なしに描き出さうとしてゐる。人間の記録たらんことを力めてゐる。筋に力を盡さないで、人物を活動させる背景なり周圍なりに詳細な描寫をなさうとしてゐる。人間普通の類型を顧みないで、飽くまで眼前に現はれた個體を描き個性を現はさうとしてゐる。その文辭は從來の修辭法が教へるところの詞藻を破棄して、新なる技巧を試みようとしてゐる。無技巧の技巧を以て表現の明晰を期して、簡素なり眞摯ならんことを求める。鋭い刺戟深い印象を與へようが爲に、多くは短篇の形式を取つてゐる。かくの如くにして、理想は排斥せられ空想は破棄せられ信仰も道德も漸くその權威を失はうとして懷疑に囚へられ、苦悶憂愁の色がすべてを籠めてゐる。されば、文藝對社會の問題が續出して論ぜられ、幾多の作品が發賣禁止になつた。風俗壞亂のみならず秩序壞亂の名目の下に、その厄に遭ふものも少なくなかつた。殊に四十三年に於いては、その傾向が甚しく、官憲と社會とは全力を蓋して、この新興文學に對して壓迫を加へようとした。時たま、我が國未會有の大陰謀が計畫せられ、幸に事は未前に防がれたとはいへ、社會の震駭は言語に絶する程であつた。かくて新興文學に對する壓迫は

愈加はるに至つた。されど、自然主義の思潮は、兎に角に瀾漫して行くのであつた。さきに四十一年四十二年頃に出でた無意味な肉慾描寫、たゞ新奇を求めるための作はその跡を絶つて、却て現實に對する嚴肅な研究が始められるやうになつた。自然主義そのものに反對なものまでも、なほ自然主義的思潮に深い根柢を置かねばならなかつた。漱石の作が何時か一轉化するに至つたのも、それがためであらう。宙外の作がまた前期に見るべからざる現實味を加へたのも、それが爲であらう。蘆花も亦『寄生木』に從來と異なつた態度を取つた。自然主義が漸く他に推移しようとするに至つたのは、外界の壓迫の然らしめる所ではなくて、主義そのものゝ傾向から出たのであつた。しかもその推移は自然主義に反對して起つたのではなくて、畢竟その分化に過ぎない。今それをいふに先ち、三十九年に溯つて、自然主義と全然その性質を異にした一系統について記すであらう。



## 第三章 非自然派の小説

自然主義派に對する俳諧派ともいふべきものは、夏目漱石に始つて、高濱虚子がこれに屬する。なほ溯つて考へると、子規の唱へた寫生文から出でてゐる。子規が「寫生文論」を草したのは三十三年であつた。曰はく、「實際の有のまゝを寫すを假に寫實といひ、又寫生ともいふ。虚敘といふに對して實敘ともいふべきか。更に詳かに云はゞ、虚敘は抽象的敘述、實敘は具象的敘述といひて可ならん。普通の實敘的敘事法は餘り長き時間を連續せしむるよりも、短き時間を一秒一分の一部に切つて細く寫し、秒々分々に變化する有様を連續せしむるが利なるべし」と。また曰はく、「文體は言文一致か、又はそれに近き文體が寫實に適し居るなり、言文一致は平易にして耳だたぬを主とす」と。

子規によつて始められた寫生文は、更に英文學趣味を加へて、漱石の諸作となつた。

漱石は三十八年の初から「ホトトギス」誌上に「我が輩は猫である」を連載し、三十九年、短篇小説集「漾虚集」を出した。「我が輩は猫である」は、一中學校教師が飼猫の口を假つて、飼主及びその周圍の人物と事件の觀察批評をなす底に脚色したものである。もとよ

り趣向も構造もなく、所謂尾頭の心元なき海鼠の様な文章、作者はたゞ日常偶然の事件に對して特殊の觀察を施し、隨處に諷刺滑稽の妙を發揮してゐる。さては自家獨得の感想を縱横に敘して、奇警人を驚かすの餘時に注意の統一を缺いて、冗長に陥つたと思はれる點も少なくない。然しながら「猫」は徒に奇警を以てのみ稱すべきものではない。その飄逸洒脫の陰には、現代に對する苦悶が存し、痛哭が存してゐる。從來の所謂俳諧者流が浮世を厭つて滑稽洒落に逃れようとするものとは異なつてゐる。さればといつて、また單純な江戸趣味でもない。飽くまでも沈鬱な底氣味の悪い英國氣質が讀まれる。猫の猫たる所以は、そこに存してゐるのである。しかも現實に對する不満、厭惡から脱して、冷かな澁い笑を以て對する所に、この作の價値は存してゐる。

『漾虚集』となつては更に沈痛幽玄の情趣が加はつて、一種の神祕的傾向をさへ有する。文章もまた前著の冗長の譏あるものと異なつて、簡勁で緊張してゐるところ、頗るステイブンスンの風貌を現はすと稱せられた。かくの如くば前著の精細な敘述はスキフトの面影とも見られよう。我が明治文學を覺醒せしめた英文學、我が文壇に接することの最も長い英文學の趣味が、始めて我が創作界に融化し、渾和した一事は記憶せねばならぬ現象である。



三十九年に、漱石は短篇『草枕』といふを出した。これは最もよくその主張と態度を示すものである。敘する所は非人情、現實に即してしかも現實を離れようとし、つねに薄い一皮膜を隔て、現實に接しようとする俳諧境、不即不離の心境を示してゐる。四十一年に出した『虞美人草』も亦その態度から出でた作である。

『虞美人草』と時を同じくして高濱虚子の『鶏頭』が出でた。一時文壇に騒がれた『風流機法』をはじめ十篇を集めたものである。漱石はその序に於いて、自己及び虚子の態度を明示して、餘裕派の小説と稱した。曰はく、「小説には元來二種がある、餘裕派と非餘裕派である。餘裕派の作品とは逼らない小説、非常といふ字を避けた小説、觸れない小説の謂ひである。餘裕のない小説はセツパ詰つた小説、一生の大事事件大問題を主材とする小説のことである。かゝる生命問題運命問題に觸れない文學も要あるものであらうか。人生を觀れば、其處には常に綽々たる餘裕が存して居る、茶を品すれば花に瀟々事もある、冗談をいへば釣鐘をなす時もある。芝居見物をなし、旅行をする時もある。この餘裕から出でたるもの、即ち餘裕派の作品にして、低徊趣味、依々趣味、戀々趣味の横溢する所である」と。

虚子は漱石と同じく「ポトトギス」派の俳人で、子規の歿後その後を繼いで率ゐて立つ

べくして、しかも寫生文に専らであつたが、こゝに一轉して小説壇上の人となつたのである。「鶏頭」の諸作は外面描寫のために外面を描寫する態度に慍らずして、人生の情趣を附與しようとするものであつた。されど、是等の作の特色は、未だ寫生文から來る描寫の技巧に存してゐるより外にはなかつた。四十一年、虚子は更に長篇小説『俳諧師』及び『續俳諧師』の稿を起したが、これには人生に觸れることが稍、深きを加へようとした。されど所詮は所謂低徊趣味を發揮するものであつた。此に於いて、評論界からは餘裕派の作品の價値を疑ふ聲も頻りに起つた。

四十一年に漱石は『三四郎』を出し、四十二年に『それから』を出した。これ等の作には精緻な心理解剖を見ることが出来る、寧ろ煩瑣に陥る程である。由來漱石の作は、作中の人物の心理を過當までに説明するところに、その累を見るのであつた、しかもその心理は人物の個性の然らしめる所ではなくて、作者の考察から出づるものであつた。これがその作をして拘束せしめる所があらしめた。四十四年の『門』は、自然主義的態度の下に描かれたものといはれる。その現實に對する觀察の如き、決して從來の餘裕派と同一のものではない。されど、心理解剖に過ぎるの弊は、亦これにも顯著なものがある。これがメレディスの長所と短所とを兼ね有するものといはれる所以である。



漱石の態度と相似て、その精緻な解剖と考察とを以てせるものに、長塚節の長篇小説『土』がある。一時評論壇に於いて頻りに論議せられた郷土藝術の傑出せる作で、特殊な地方色の最も明確に描かれた點は、作者の苦心を推察することが出来る。

現實を超越して俳諧境裏に逍遙しようとした餘裕派も、いつか自然主義の態度に近づいたといはれる時に、なほ現實から脱して空想境・神祕境に入らうとする態度を不斷に守り來つたものは鏡花である。その名聲は自然主義派の作のもとに壓せられてゐたけれど、その特色は餘蘊なく發揮せられた。三十九年の『悪獸篇』『海異記』の短篇を始め、四十一年の『草迷宮』『女系圖』『沼夫人』また四十三年に『國貞畫』『白鷺』等の諸作が出た。作者は黄昏趣味・東雲趣味について敍べた事があつた。晝から夜に入る刹那の世界、光から暗に入る刹那の境、また暗から光夜から晝に移る微妙な色彩の世界がある。これを人事に及せば、善から惡から善に移る刹那に、また一種微妙な形象心狀を現じようとする。この中間の趣味・中間の世界を描き出さうとするのが、この作者の欲する所であつた。その諸作は實にこの趣味のために幽韻玄妙のものとなつた。一種のロマンチックといはれやう。そして、その中には一種の象徴を寓する様に思はれる點が少なくなかつた。そこに初期の作と稍異なつて重きをなす所があらう。然し、技巧を

離れ文辭を外にしては、その價値を見ることは出来なかつた。自然派の勢力がその中心をなす時にも、或は少しくその傾向を攝取する所がないでもないが、兎に角に自己の特有を固持して動かなかつたのは、また文壇の一奇傑といはねばならぬ。

宙外は自然主義に反抗して、飽くまでも道德の旗幟を明かにしようとするもの、常に堂々として自然派と筆陣の間に相見えてゐた。その作に『月に立つ影』『裾野』『五日市』等がある。その作風は依然として前期と同一様で、多く説き多く敍せんとするものであつたが、その題材に對する態度の如きは、不知不識の間に自然主義の傾向を有するに至つた。

天外は昨の寫實主義の態度を守つて自然主義と相接しながら相異なるところを有してゐた。『コブシ』『長者星』等の長篇の作がある。皆ゾラの解剖を模倣したもので、前者には婦人が節操を破るに至る徑路・遺傳に支配せられる血族間の氣質體質の異同、自殺者の絶息に至るまでの精神狀態等が、委曲を盡して記述されてゐる。後者は他の作家が取り扱はなかつた實業家の間に取材して、文壇の注目する所となつた。敍して精細を盡す老功の手腕は、到底他の新進作家の及ぶ所ではない。

歴史小説は塚原澁柿の獨特の壇上である。『澁柿叢書』といふ名目の下に、數種の作を



出してゐる。中にも『大島逸平』『水戸黄門』『葵と桐』『木村重成』等が傑れたもので、よく時代の背景と人物とを活動せしめてゐる。

新聞小説は『生』といひ『春』といひ、自然主義の小説も之に與るやうになつたが、その重なるものは家庭小説といふべく、在來の道德と調和すべきものであつた。これには柳川春葉及び田口掬汀がある。春葉は『母の心』『縁の絲』『やどり木』より『操』に至るまで絶えず筆を執つてゐた。掬汀は『伯爵夫人』『第一人』等の諸作がある。二者共に筋の發展に忙はしくて、性格の描寫が未だしく、文章の洗煉も亦物足らぬ所がある。對話の妙、行文の平易、よく婦女子をして飽かしめない點は、掬汀の方が遙かに卓れてゐる。

#### 第四章 自然主義の分化

既に言つた如く、三十九年の小説壇には新傾向を生じて自然主義の兆を呈したが、四十年にはその運動が中心となり、四十一年には舊文藝を打破して、新思潮の實現に力めて、嚴肅に眞面目に人生を觀照して、自己に忠なる作品を出さうといふことに努力した。四十二年もまたさうであつた。さきに主張のために呼號したものは沈靜の狀をなし、平安の域に入つたが、之に續くものは沈滯不振、また固定の狀態であつた。行詰つた自然主義といふ聲は頻りに放たれた。畢竟、これは自然主義が餘りに嚴肅な態度を持つるに勞れた爲か、その單調に陥つた爲か、それともまた自然主義が型を破つて更に新なる型に入らうとする傾向を有するが爲か。兎に角に現實の醜穢な事象を餘りに多く見ざるを得なかつた眼は、他に向つて放たれることを欲した。自然主義の主張する所の眞なることは理智はよく之を承認する、されど情意は慊らなかつた。更に何物をか求めようとした。舊い信仰舊い道德を破壊し去つて、なほ建設の伴はない後に立つては、求めるところは更に高く更に遠いものであつた。壓迫せられた主觀は、客觀と肩を



竝べて立つた。拘束せられた情緒はまた解放せられた。もし進んで求める所のあらうとするのはネオ・ロマンチズムをなすであらう。鈴木三重吉・小川未明等に見る所がそれである。退いて觀照の態度から脱離せるものは享樂主義となるであらう。鷗外・荷風・森田草平等の作に現はれたものがそれである。少年時の回顧・江戸趣味の回顧も、おのづから起り來るべき所であらう。荷風及び久保田萬太郎の作に認められるのがそれである。これ實に四十三年以後の趨勢である。かくの如きものを以て、さきの自然主義派の諸家の作と比較する時は、生の觀照と生の享樂・藝術品の製作と自己生活の藝術化の差を認めることが出來やう。されど、それ等の異同の下にも、現實の底流・一道の自然主義的思潮はなほ絶えぬものがあつた。皆現實の深い根ざしの上に立たうとする趣が見られる。客觀の上にあつて主義をも擁しようとするのである。これを自然主義の反動といふも可、反抗運動といふも可、しかもこの趨勢は大局の上に一時期を劃するまでには至らなかつた。その活動の端を開いて未だ眞の運動に入らざるに先だつて明治の時代は終りを告げたのである。故に、しばらく自然主義の分化を以て呼ぶこととした。

四十三年の七月、鷗外は「三田文學」に短篇「あそび」を出した。何をするにも子供の遊

んでゐるやうな氣になつてゐる一官吏が、政府てふ大機關の一小齒輪となつて自分も廻轉してゐると自覺しながら、なほ遊びの氣になつてゐる。文學の著作に對しても遊びの心持を以てして、つひに眞劍になる事が出來ぬといふのであつた。自然主義者が嚴肅を説き眞面目を説く時に、この作があつた。上田敏が長篇「渦巻」を著して、中に新しい人生觀と藝術觀とを説き、自然主義から脱して生の享樂に入るべき主張をなしたものと共に論議非難の聲が一部から起つた。自然主義はこの頃から分化すべく轉化するべき傾をなしてゐたのである。行き詰つたその主義を他に向はせる爲に、極言をなしたものと、いふことが出來やう。この「あそび」は鷗外の藝術的態度を明かにしたのであつたが、鷗外は最初から自然主義とは不即不離の態度を取つてゐた。肉慾を描いた『キタ・セクスアリス』の如きものがあり、短篇集に「濁流」の如きものがあり、長篇に「青年」があつた。新興文學の隆盛と共に、舊い作家の多くは文壇の中心から逐はれる觀を呈した時、ひとり鷗外のみは豊富な學識と熟練な技巧とを以て、若い作家に伍し、更に之を指導しようとする概があつた。諷刺の作、問題小説の作、情緒の作と、常に新しい試みをなして、出沒端倪すべからざるものがあつた。單調に陥り勝ちな自然主義極盛の時、それ等の作があつて、複雑の色を帯びさせた。要するに、かれは享樂派の驍將、しかも



なほそれに立ちながら、そこにも不即不離の態度を取るものであつた。

『地獄の花』を残して海外に去り、四十年に『あめりか物語』を齎して歸れる荷風は、『歡樂を』出し、『監獄署の裏』を出し、『新歸朝者日記』を出すに及んで、『地獄の花』のゾライズムを棄て、『あめりか物語』の觀照の態度を改めて、情緒的耽美的享樂的な傾向を示すに至つた。かくて四十三年の五月には、長篇『冷笑』を『朝日新聞』に出しはじめた。作者の言をかりていへば、この作の第一の目的は、亂雜淺趣味な明治四十三年の東京生活の外形に向つて、沈重な批評を試み、その時代の空氣の中に安住することの困難なるを歎息し、併せてわが純良な日本の特色の那邊にあるかを考究摸索しようとしたものである。日本人は深く考へないで諦めをつけて仕舞ふことが世界無比である。それを滑稽冷笑の調子を以て發表する所が、殊に日本の生活及び思想の根本に最も適合してゐる。この意味に於いて、『八笑人』のやうなものを持ちだし、題をも『冷笑』とつけたのである。要するにこれは享樂主義をのみ歌つたのではない。寧ろ享樂主義の主人公が、風土の空氣に餘儀なくせられて、川柳式<sup>カワヤナギ</sup>のあきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものである。この言葉でも知られる如く、『冷笑』は必ずしも觀照を離れたのではないが、今は冷靜な觀照に立ち止まつてゐられなくなつた。現代の絶望は寂しい他

の世界を求めねばならなかつた。『冷笑』の主人公は遂に江戸趣味に於いて生きるこゝとが出来た。荷風のこの傾向は『すみだ川』に於いて、『新橋夜話』に於いて、なほ一層明かにされた。自然主義の文學が幻影を破毀した爲に絶望の悲境に陥るとせば、江戸趣味はやがてそれを補ふべき幻影である。江戸趣味は現實に觸れず、人生の意義に接せず、故に淺薄であるが餘裕を有してゐる。されば、自ら懷疑苦悶に囚へられた近代人の隠れ場所となつた。草雙紙の女の意氣地歌澤のやるせない節調に、その倦怠の情を慰めやうとするのであつた。この江戸趣味に對する憧憬と追懐とは、幾多の模倣者を出すに至つた。『三田文學』『スバル』等に現はれた新進作家の作品に、多くそれを見ることが出来る。所謂下町文學はかくして起つた。萬太郎の『淺草』は、その一代表作である。その中に載せられた多くの短篇は、下町の空氣ある優婉な纖弱な感<sup>カミヤ</sup>を起す空氣を描寫してゐる。薰の『大河端』の如きも、その情調の上に描かれた作である。

追懐と回顧とは人をして無邪氣な少年時代に歸らせる。荷風が隨筆『紅茶』の後に記した多くの小品には、それがよく現はされてゐる。雜誌『白樺』の同人の作にも、この傾向が見られる。追懐の筆は多くは哀傷的のものに歸着する。下町の描寫はまた自らセンチメンタルのものとなる。荷風の作は纖細微妙な官能美を以て稱せられたもの、そ



の傾向はまたこれにも現はれて居るものといはれやう。殊にこの傾向を極め、その特色を發揮して殆ど餘蘊のないものは、谷崎潤一郎の作である。その短篇集『刺青』に現はれた題材は、また少年時代と江戸趣味に對する追懷と憧憬とであつた。しかも官能の美は縦横に描き出されてゐる。その極は一種の病的心理を取り來るに至つた。「癡風」「惡魔』に出づる所、皆たゞ官能のために生きてゐる人である。奇怪な題材を採るのは、その人を活躍させんがためである。故にこれを實現に即する上から見ると、所詮一片の空想に過ぎない。たゞ作者は空想としてまた病的心理として之を描かず、常に新しい人生觀の暗示たらんことを期待してゐる。これが巧妙な文辭と相俟つて賞讃を博し得た所以である。

『尼僧』『滯』に出た長田幹彦の作も同じ様な點があるが、なほ現實に接することが多い。これも亦新しい生活の暗示を試みようとするものであつた。

享樂派にはまた草平がある。幾多の短篇はあれど、長篇『煤煙』と『自敘傳』とを傑出したものとせねばならぬ。共に主觀の情趣の湛へられた點が獨得の壇場である。

もしネオ・ロマンスの傾向を有する者を今の文壇に求めるものがあるとするれば、人は必ずや三重吉と未明との二人を擧げるであらう。しかしながら、この二人者の

藝術が果してかの歐洲に於ける最近傾向のそれと全く同一のものであらうか。靈の覺醒から發つた神祕夢幻の藝術であらうか。さう見るには未だしいところが多い。ただかの傾向に相通するものがある。これが新ロマンスを以て稱する理由である。されば、その作品が或はたゞ空想に過ぎない情調を出すに過ぎないといはれるのも、亦理由がないでもなかつた。

三重吉の作は短篇集『千代紙』に始まつて『おみつさん』に至るまで多くの短篇があり、長篇には『小鳥の巢』がある。その中には『鳥』の如き『小猫』の如き、現實の暗黒面を描き、醜汚なものを描いたものも少なくない。或は『小鳥の巢』の如く痛ましい自己を描いたものもあつた。けれど、その獨得の境は他の多くの作に於けるが如き、繊細な官能を以て光彩陸離たる想像を拉し來り、これを圍むに抒情詩的情味を以てせる夢幻の境である。そして彼の作をして、こゝに至らしめたものは、過去の回想追懷である。今は見ぬ世の幻の女を求め、如き憧憬である。しかも追懷憧憬の底には、求めて得ざる深い苦惱と煩悶とが横はつてゐる。解放せられた情緒の中にも脈々として盡きない現實味がある。そこには人生に對して取る所の眞摯な態度から來る深い苦しい色調が現出されてゐる。一見空想を以て造り上げられたが如き、しかし寫生文的の餘裕ある筆



致を以てせる淡い舊い戀物語めいしてしかも悲痛卒讀に堪へざるものが多いのは要するにこれあるがためである。

未明の作も長篇『麗』短篇集『惑星』『闇』に於けるごとく、また憧憬と追懐とを以てせるものが多かつた。故に幼年時代や少年時代を主題にしたものが少なくなかつた。これは人生生活に對する絶望、運命に對する恐怖、生存に對する不安動搖を避けるために、さうであつたと見ることも出来る。未明の作品には社會の虚偽人間の築き上げた文明の淺はかさから來る懷疑呪咀も描かれてゐる。それに對する絶望、またそれを脱しようとする苦闘も見られる。されど、その少年を主人公とするは、やがて少年の心を以て人生に對し自然に對しようとするものであつた。純粹な強い感情を以て占められた少年は、すべてを實感に訴へ、感覺を鋭敏に動かして、すべてを官能的たらしめようとする。此に於いて、日常の生活にも不可解の力を認め、神祕の力に驚かんとするのであつた。憧憬と追懐の情緒に配する神祕のひらめき、更に『少年の笛』に見えたやうな人生に對する絶望から飛躍しようとする態度は、或は未明を毒するものであるといふものもあつたが、兎に角相よつて一の新ロマンチズムの傾向を帯びさするものであつた。

## 第五章 詩壇の活動

### 一 新體詩

戦後の新體詩界はまた活躍の状態を呈した。林外は多彩の空想を操り、横瀬夜雨は可憐可愛の詩想を歌ひ、小山内薫は修辭に力を盡した。されど、廣く之を見る時は、泣菫と有明とを以て代表せしめることが出来よう。そして、泡鳴はさながら彗星の如く、その間に縦横の行動をなして、つねに新しき論を立ててゐた。更に一般の現象を纏める時は、これを象徴主義と自然主義との提携に歸することが出来よう。

さきに有明の『春鳥集』によつてその端を示した佛蘭西象徴派の詩風は、或は朦朧晦澁と評せられ、随つて是非の論も盛んであつたが、それは畢竟漠然たる思想と幼稚な技巧とが累をなしたのである。然るに、その技巧はよく練磨せられて、平明の調が加はり、また人生を歌つては痛切深刻にその根柢に觸れることが出来るやうになつた。實生活に觸れておのづから發する思慕、欣仰、讚美、呪咀、憎惡の聲は、やがて詩となり歌となつた。これ實に技巧上の名目に過ぎなかつた象徴主義が、今や一世に漲り來らうとする自然



主義の傾向と相合した爲である。「有明集」二卷の中には、これ等の傾向が最もよく明かに示されてゐる。現代生活の悲哀不安動搖がよく歌はれてゐる。但しその情緒は激越なもの、沈痛なものではなかつた。有明の得意の技巧、細緻な彫琢は、その典雅な形式を完成したが、それと共にまた情緒その者を宛らに表現することは出来なかつた。「有明集」に對する毀譽褒貶は此點から出でたが、また先の如くたゞ矜驕晦澁を以て評し去るものではなかつた。これは象徴詩風が如何に深く浸潤したかを示すものであらう。

かういふ傾向はまた泣菫の『白羊宮』に於いても見ることが出来る。「白羊宮」は蓋し三十九年に於いて出版せられた詩集の中にあつては、最も注目すべき作品であつたらう。この集に於いて著しい特色は、零餘子、金星草、無花果、鈴蘭、鷓鴣、鳩等の草木鳥蟲その他の自然物に感興を寄せ、力めてその風趣を髣髴せしめようとし、更にまた之を假り用ゐて、人生の象徴としたことである。即ち自然を以て人生の象徴と見る傾向、かの自然主義の求めようとする徑路は、よく之に於いて見ることが出来る。この集の他の特色は古語の復活に力を盡したといふ點である。人生と自然との融合によつて典雅幽邃の風趣を求め、爲に、おのづから古語を取り來つてその典麗な趣を借りようとするのであつた。その可否は兎もあれ、詩語の豊富を加へたことは少なくない。

この二家がなほ技巧の妙を求めて詩の生命とする傾から脱し難い時、詩語の蕪雜に流れるをも顧みず、眞實な人生當面の事實によつて之に痛切な解釋を加へ、冥想的詩風をなしたものは泡鳴であつた。これにも自然主義の傾向は、おのづから認められた。それがやがて彼れの「自然主義的表象詩論」をなすに至つたのであらう。

このやうに自然主義の影響が詩壇のすべての部分に現はれた時、更に明かに之を示したのは鷗外と明星派との詩風であつた。鷗外は腰辨當といふ匿名のもとに、三十九年の五月の頃から雑誌「藝苑」「趣味」「明星」等にその試作を出した。卑近な題材、市井に見るところの事物により、平淡な描寫をなした。如何に日常の生活、俗の一語を以て評し去るべき市井の雜事も、なほ感興を惹くに足るかを示すものであつた。要するに、その市井詩は卑俗生活に對する寫生的描寫の興味を表すに外ならぬものであつた。平淡平明の詩境を開拓する努力に過ぎなかつた。然るに明星派はこの主張を更に内面的に進めるに至つた。市井詩が自然を自然として寫す時、これはその裏面に隠れてゐる何等かの意味を求め、自然の中に主觀の對象を求めたのであつた。與謝野寛及び北原白秋、茅野蕭々、大井蒼梧、平野萬里等の作がそれである。その題材は都會道路、川蒸氣、鐵工場、鎮守祭、試驗場の如き日常生活に最も近いものを選んだ。また句法用語の上に、そ



の一語一句をも苟くせざる技巧を重んじた。

三十九年二月、英詩人野口米次郎、泣菫、有明、林外、泡鳴、花外、白星等は、英米の詩人アーサー・シモンズ、ウィルアム・エーツ、ミルラー等と共にあやめ會を創立し、詩集「あやめ草」及び「豊旗雲」を出したが程なく解散するに至つた。

四十年に相馬御風、人見東明、野口雨情、三木露風は早稻田詩社を起し、河井醉名、夜雨は詩草社を設けて雑誌「詩人」を出した。その主観詩は實に自然主義によつて興へられた現實思想から生れ出でたものであつた。詩草社同人の川路柳虹に言文一致體の詩があつた。雨情に「朝花夕花」の第一集及び第二集があつた。平淡な俗語體を以て注目せられた。さきに民謡の彙集研究に關する議論があり、雑誌「百合」また内地諸國の民謡を彙集せるが如きものが新風調を促す聲と共にこれをなしたのであらう。然し共に一時の創作で、詩に對する根本的革新から出でたものではなかつた。

泡鳴の詩集「闇の杯盤」が四十一年に出でた。これはその標榜する所謂自主自然主義的表象詩であつた。宗教的形式から脱却し、神經と自然との燃焼流化により、刹那的生慾の發現によつて自ら發し自ら達すべき新しい詩を求めた。眞摯熱烈刹那的表象の幻像こそ抒情詩の本領とする所である、即ちこれ心理的詩歌であると。觀照と實行とを一

になす、新自然主義の人生觀は、燃えるが如き言辭を透して詠み出された。そして、これが詩壇に一動搖を來し、未曾有の革新を起す動機となつた。

泡鳴の詩風を見て、その當然至るべきものたることを首肯する者は、更にかくとも猶言語の制限の中にある理由を疑はざるを得なかつた。詩歌本來の特質たる形式上の制約は、果して如何なるものであらうか。口語詩の運動はかくて起つた。抱月は雑誌「詩人」に於いて、現代の詩は言文一致の句法たるべきことを説いた。御風は早稻田文學誌上に於いて、詩歌の形式は即ち人間の情緒さながらの形式、主観さながらの形式たることを立論した。これ、我なるものの聲を聽き且つ歌ふ、即ち直截に自由に自己中心の聲さながらの形式こそ眞の形式といふのであつた。從來試みられた口語詩、即ち俗語體はなほ舊套の口語、今は進んで現代吾人の用ゐる口語でなければならぬ。また詩調も舊來のものを破壊して、自由な情緒、主観さながらのリズムたることを要求した。行と聯との制約破壊をも要求した。要するに、人生生活の客観さながらの形式を小説に求めて、自然主義を得た如く、これは主観そのもの、形式を詩歌の自然主義として現はさうとするのであつた。

御風がその論を出したは四十一年の二・三・四月であつたが、ついでその五月には「瘦犬」



を出し、露風もまた『黒い扉』を出した。こゝに於いて、泡鳴、有明、Q、L、O及び服部嘉香の論難となり、一時詩壇を動かした。この形式破壊と自由詩口語詩の唱道とは、遂に勢を築きなした。四十二年に至つては益々激しさを加へた。自然主義が文壇の主なる思潮である限り、この運動は益々勢力あるものであつた。

さらば、詩の内容は如何なる進歩をなし推移を來したであらうか。制約的形式を棄て、自由な個性的形式をなし得た今日は、最早やセンチメンタルでも、ロマンチックでもなく、官能的利那的のものをなすに至つた。自由詩社同人の活動は實に之を代表するものであつた。東明、加藤介、春福、田夕、咲山、村暮、鳥等の作には官能的氣分をさながらに歌つたものが多くあつた。靡爛せる神經、頹廢絶望の戰慄、或はその氣分を表はすために、唇、血乳房等を取り來るのであつた。そして、この詩風にあつては北原白秋を以て傑出したものと見るべきであらう。その著作の世に認められたのは四十二年の『邪宗門』である。自然又實際生活そのものゝ感情官能を表現しようとした。殊に、その豊富な語彙に至つては他の模すべからざる所がある。詩調の優麗なことも亦遠く群を抜いてゐる。時にはこれが爲に技巧に陥るかとも見られる程である。露風の『廢園』も『邪宗門』に劣らざる新しみを有してゐた。その自然に對し實際生活に對する態度に就いては、却て前者よりも優れた所があつた。

四十三年になつては詩壇の形勢は益々盛大になり行くのであつた。牧水はその主幹となつて雑誌『創作』を發刊した。この年はまた口語詩以外、他の方面からも詩界の革新を促した。それは散文詩の運動であつた。形式破壊の論は、さきに口語詩となつた。しかし未だ創作の方面では充分の効果を現はすことが出来なかつた。この状態を見て、その表現の自由を利用し、複雑な近代思想をさながらに描き出さうとするのが散文詩であつた。これを試みたものは泡鳴、福永、挽歌、佐藤、綠葉、八橋、有春、及び醉茗であつた。もとより是等の人々の試みる所は、必ずしも同一途に出づるものではなかつた。或者は口語から成る無形律のものを散文と稱して、ホイットマンの詩風を輸入した。或者はツルゲネーフ、ポートルの詩形の迹を襲つた。有春が散文詩に試みた『都會趣味』は、實に詩壇に汪溢せる現象であつた。なほその一現象は、白秋、木下、奎太郎等の手に編せられた雑誌『屋上庭園』が、異國情調と共に都會生活の趣味の謳歌に力めたことによつても知ることが出来やう。挽歌の試作は『香作』と題する詩集の中に集められてゐる。その描く所の複雑なことは、他に比類のないものといはれた。そして、醉茗の『霧』に至つては新しい形式によつて新しい技巧を試みたもの、これまた特記すべき作品たるを失は



なかつた。

四十四年に白秋は『思ひ出』を出し、これと同時に東明は『夜の舞踏』を出した。中にも『思ひ出』は詩界に一時期を劃するものであるとも評せられた。作者は題していふ「可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を、私のなつかしい人々の手に獻げたいと思つて、なるべく自分の親しみ深い釋い時代の思ひ出を茲に集めた」と。集の中には「骨牌の女王」と題する新しい異國趣味の童謡體の歌もあつたが、殊に傑出したのは「生の芽生」とて幼年時代の性慾史を歌ひ、強烈な南國的色彩を附したものの「Tanka Johnの悲哀」とて春のめさめ以後の少年時代の悲哀を歌つたもの、及び「柳河風俗詩」として郷里の風物酒倉の生活を歌つたものである。

自然主義の窮まるるところ、現實の齎し來る不安、壓迫、嫌惡は、おのづから隠れ家を求めしめて過去の追想幼年時代の回想とならしめた。これが文壇一般の傾向であつた。白秋の『思ひ出』はその追懷文學として異彩を放つたものである。『思ひ出』はまた新しい俗謡體に於いても成功した。柳虹が『路傍の花』に於いて現代語の口語詩を出す時に、これは蕪雜なるを悲んで、洗煉を遂げようがために俗謡體を取つた。中にも「柳河風俗詩」の如きは、地方色をも出さうとするものであつた。

『夜の舞踏』は自然主義の分化とも見るべき享樂主義の上に立てられた事は、なほ『思ひ出』の如く、而も官能的な微妙な描寫は、また相並んで評せられるものであつた。

四十五年に出でた多くの詩集中で、世の注目する所となつたものは、福田夕咲の『春の夢』である。これも『思ひ出』『夜の舞踏』の傾向の後にあるものであつた。技巧の點では未だ前二者に比することが出來ない。古い俗謡の示す心意氣といふ事以外に、多く出づる所がない。

森川葵村の『夜の葉』も出でた。これは陰影に潛む哀愁と追憶とを謳はうとするものであつた。これも未だ完成の域を去ることの遠きものである。

## 二 和歌

新體詩がかくの如き途を踏み來つた時、短歌は如何なる状態を以て進んでゐたのであらうか。もとより、文壇の一隅には、なほ舊派の歌風を守るものが少なくはなかつた。またそれに近い竹柏園一派の活動も、ひき續いて盛んなものであつた。雑誌『心の花』の刊行や短歌『玉琴』の編輯はそれを示すものである。所謂新派には、まづ晶子の作品を見なければならぬ。三十九年に出した『舞姫』は、豊麗典雅を以て知られ、『夢の華』には冷



静に人生を觀ようとする傾向が現はれた。その傾向が窮まる所は四十四年の『春泥集』と四十五年の『青海波』とであつた。實生活の觀照省察の其の堂に入るものがあつた。眞摯な大膽な自己の告白が、その巧妙な技巧と相俟つて、人を動かすものがある。

薰園もまた不斷の努力を以て多くの歌集を出した。『覺めたる歌』『わがおもひ』『山河』等がそれである。中にも『山河』はよくその詩風を示すものである。薰園の詩風はもと自然を自然としてさながらに歌ふものであつた。それが『覺めたる歌』以來漸く自己をも見る様になつた。就中『山河』となつては、生活の倦怠から自然の懐しみに歸る思ひを詠んでゐる。然し、未だ自己と自然との融和を見るに至らなかつた。

柴舟も亦歌壇に貢献するところが少なくなかつた。その歌集に『靜夜』『永日』等がある。その調は清新つねに一味の雅趣が油然として湧いてゐる趣がある。その歌ふところは冥想、人生に對する思索であつた。その歌が時としては全く散文的になつて、興味の索然たるものゝあるのも、この故であらう。

窪田空穂には『空穂歌集』があつた。前期末の作『まひる野』以後のすべてを輯めたもので、その作風の變遷を見ることが出来る。技巧の圓熟は後に至るに隨つて加はつてゐる、けれど燃えるが如き情熱は漸次に熄むかの狀を呈して來た。これと共に人生を

觀るの態度は正鵠を得るやうになつた。

新體詩壇に官能の解放といふ一時期を劃するに至つた四十二年以後、しばし文學の大勢から隔離されつゝあつた短歌は非常の勢を以て行はれた。新しい若い歌人の群は雜誌「創作」に「詩歌」に「自然」に「サムボア」によつて活動をはじめた。その中に覇を稱するに足るものは、白秋と牧水であつた。白秋の短歌はなほ新體詩に於いて見るが如く、細緻な官能と微妙な音律とを以て勝つてゐる。牧水の獨り歌へる「別離」路上は寂しい内省の歌として暗い冥想の調として、しかも溫藉な情緒のほめきを見る點に於いて、世にもてはやされた。牧水の歌は自然を通じての自己、自己を透しての自然が渾然として一になる點が、白秋の主として都會情調を歌ふものと異なる所であつた。この點に於いては、寧ろ柴舟、薰園等に近いものがある。

白秋と同じ傾向を有するものは吉井勇の詠である。その集には『水莊記』がある。これは一種の歌物語ともいふべく、戯曲的構造を有する文章の中に、和歌を編めるものである。その中に或は恐しい人生の運命を説き、或は紅燈街裏の歡樂のはかなさを歌ひ、或は鑛山山上の戀愛の傷しさを歌ひ、或は海郷に神仙と戀愛を歌ふなど、縦横の歌才を示して餘りあるものがある。主としてこれらは何れも享樂の聲である。『酒ほがひ』



も亦歡樂の悲哀を歌つたものである。

土岐哀果と前田夕暮との詩境は全く之に反してゐる。その歌ふところは歡樂の巷でもなく、憧憬の情趣でもなく、實生活から來る悲哀と慰藉とであつた。多忙なる日常生活に人と人との間の矛盾を傷み、薄暮の街路にその風の黄なるを哀み、疲れた腦から沁み出づる過ぎし日の追憶を懐しむといふのが、哀果の『黄昏』である。何を描いても、自分の生活を根柢にして歌ひたいと思ふ、極めて通例の一凡人の生活が、少しでも私の歌を透して窺はれたら、私はそれに満足したいと思ふといふのは、夕暮が『收穫』等を始としての主張であつた。

更に『南方の花』とて、近藤元といふ人の歌集がある。日本で一番の詩人らしい生活をして居ると題せる作家の自己をさながらに出したものの、頽廢し困憊せる心情を鋭敏な官能を以て歌つてゐる。されど、圓熟といふには、なほ遙に遠いものであつた。

石川啄木には『二握の砂』と『悲しき玩具』とがある。病苦に満てる實感をそのままに咏み出でたのが、他に比し難い傑れた點を有してゐる。その身は病床に臥して、しかも心は一切の束縛から脱して、自由の技巧、奔放の情熱、人生の奥に徹して之を歌ふところ、歌壇に一新趣を寄與したものであつた。不幸にして作家はこの二集を残して早世し

てしまつた。

### 三 俳句

新體詩界、和歌界には、以上見るが如く、自然主義の影響の著しいものがあつた。俳句はもと超然として世相の外に立つもの、然るにその自然主義の影響餘波はこゝにも更に大なるものがあつた。所謂新傾向の俳風はかくして起つた。蓋し俳句はこの自然主義の感化を受けずとも、おのづから一轉すべき状態にあつたのである。子規は初め寫生を唱道した。寫生即ち俳句であるとも考へた。然し、それは平凡に陥ることを自覺して、配合法を唱へる様になり、蕪村調を出す様になつた。子規歿後の俳壇は、しばし蕪村調の眞諦を求めると忙しかつた。そして、これを明治俳風の圓熟せるものとした。おもふに、蕪村時代は蕪風の大成した時で、しかも衰頹を兆し、停滯を現はす時であつた。かくの如くにして、明治の俳句は元祿・天明の遺珠を拾つて足れりとしなければならなかつた。虚子は此に於いて俳句の境は已に盡きたものとして寫生文に轉じた。これと共に、漸く聯想の遊戲を事とするものを多く見るに至つた。かくて墮落の端が示された。此際に於いて、衰頹を救ふ唯一の策は、趣味の態度を轉回するより外はない。こ



れ實に子規の努力の補足であつた。明治の俳風はこれを得て始めて完美するものであつた。四十一年に碧梧桐は「日本及日本人」に於いて新傾向の俳句に就いて論じた。大須賀乙字は雑誌「アカネ」によつて種々の方面から新俳句を説いた。碧梧桐は題材の個性を發揮するにありといひ、乙字は、作者が萬人と同じ目を以てせず、自分の目を以て深く見んとするは、物の個性發揮と共に自己の個性發揮であるといふのであつた。要するに、これは客觀的態度に偏したもつから、主觀的趣味に移らうとするのであつた。季題に對する膠着の聯想から脱して、各人が自己の眼を以て新しい自然を見よといふのであつた。

新傾向の俳句は叙事に於いて叙景に於いて複雑な取材をなした。描寫に於いて委曲精緻のものとなつた。單純な寫生から感情の描寫に移つた。平面的類型的のものから内面的個性的なものとなつた。

大門を押されてはいる櫻かな

四方太

遊女町櫻植ゑしと覺えける

紗羊

前句は「春夏秋冬」の中の句、後句は碧梧桐が率ゐる「日本及日本人」の句と比較してその差のある所が知られよう。新傾向の俳句に於いて殊に顯著なのは、實感を主とし印象

を重んじた事である。自己の經驗の上に吟詠の想を構ふる努力は、自然に我等の日常生活に接近せしめるのであつた。生活の思慕を吟じ悲哀を吟ずる、到底一茶や太祇の比ではない。これによつても自然主義の俳句に及ぼした事の多大なるが知られる。これと共に、その主張はともあれ、俳句は元來季題に囚へられる約束的の文學である、どうして生活の諸相を自由に吟ずることが出来やうか、かういふ疑問が起らざるを得なかつた。こゝに於いて季題に關する新しい解釋は起つた。季題とは條件を附した知識的の約束ではなくて、國民性の流露と發展の上に資する先天的性質を帯びた約束である。春雨は俳人の感想が俳人のみに抽象せられたものではなくて、自然に對する感想の醇なものである。即ち俳人の季題趣味は一種の象徴である。季題趣味の象徴は我等の祖先の直覺し認識したものを、直系的に傳承し感受するにある。これが他の文學に類を見ざる特徴である。かくの如くにして、固定せる形式を破壊し、却てそれによつて新らしい趣味を發見しようとするのであつた。

碧梧桐のこの主張は、さながら颯風の如き勢を以て俳壇を席卷した。「日本俳句鈔」及び「續春夏秋冬」は皆それと歩武を同じうするものであつた。もとより碧梧桐と相並んで獨特の壇場を有するものも少なくなかつた。鳴雪は終始一貫して溫雅の調を以



て『鳴雪句集』を出し、青々はまた『青々句集』を出し、傍ら雑誌『寶船』の經營に力めてゐた。虚子は俳句に疎遠となつたとはいふものゝ、その句集に『新春夏秋冬』があり、また雑誌『ホトトギス』を經營して、他日の機會を待つかの如きものがあつた。しかし、碧梧桐の勢力は是等を壓するに足るものがあつた。樸天鵬の經營する『蝸牛』、萩原井泉水の『唇雲』乙字の『アカネ』の如きは勿論碧梧桐と全然一致するものではないが、兎に角にその一派と見ることが出来る。その俳風は地方にも廣まつた。碧梧桐が東西に俳行脚して説く所のあつたからでもある。『三千里』と題する作はその紀行と吟詠とを示したものである。

碧梧桐はそれはじめ新傾向の俳句を説き、題材の個性を探るの要を説いたが、それと共に趣味を忘却しない事を望んだ。趣味的個性は容易に發見せられるものではない。個性を探る弊は、難解趣味に陥ることを危んだ。然るに不幸にしてその言は自己の吟及びその一派の吟に當つべきものが少なくなかつた。即ちたゞ技巧に腐心して、何等の感激をも有しない作を出すに及んだ。これがその主張の是認せられながら、その作の非難せられる所以であつた。

とはいへ、この運動があつて、所謂俳天地に逍遙せる俳句をして始めて實人生に接觸

せしめ、新興文學と並行せしめた。季題趣味の如きも、單に自然に對する分類と見ないで、實人生の表現として見るに至つた。俳句の形式に於いていふ時鳥は國民的生活の表現としての時鳥そのものより、時鳥に對する感興を表はしてゐる。故に、この場合の時鳥をして内的經驗の表現たらしめるやうに力めるところに、俳句の技巧の根本義は存してゐるといはれた。故に俳句は實人生表現の一般藝術と比する時は、表現すべき民族精神に加へるに技巧によつてその特色を發揮するものであるとせられた。かくの如くにして、俳句は國民的藝術と解せられるに至つた。



## 第六章 劇壇の新氣運

戦後の文壇には以上の如く種々の新しい運動が起つた。その中でいち早くも成功の實を擧げることを得たのは小説であつた。詩歌は之に次ぎ、演劇は最も遅れた。四十三年に及んで、劇の新運動は始めて活躍の狀を呈して、新興文學の最も生々潑刺の氣を具するものとなつた。これまではその機縁の熟するを待つてゐたものともいはれよう。これは演劇の刷新が他の文學に比することの出來ない幾多の困難が横つてゐるからである。すなはち演劇の刷新には、脚本も新しく、俳優も新しく、舞臺監督も新しく、俗衆を離れた新しい試演場を得ることを眞先にしなければならぬ。然るに脚本の新様それはともあれ、他の實際問題に至つては、中々に實現することが困難であつた。剩へ現代に相應しない舊趣味に彷徨するものゝ勢力は、實に侮るべからざるものがある。かくて四十三年以前、この舊趣味と戦つて空しく敗殘の憂目を見、或はそれに同化せられることの止むなきに至つたものも、少なくなかつた。

戦後の劇壇はまづ文藝協會の活動に始まつた。これは演劇に専らなるものではなかつたが、その事業の主なるものゝ一として、劇の改善を期するにあつた。三十九年二月、その發會式の餘興に、逍遙の振事劇「新曲かくや姫」に節付けした謠曲と永井空外の雅劇「妹山背山」小波の喜劇「誕生日」及び逍遙の「春手鳥孤城落月」とを演じた。これが所謂文士劇の氣運の動き始めのものであつた。五月には、演劇記者の組織せる若葉會は、杉賢阿彌の作「内海落」石田寅彦の作「公平天狗問答」及び「熊谷陣屋」を演じた。それが軸となつて「毎日新聞」演劇團體の組織を見るに至つた。異なつた種々の階級から登場者を出して、演劇の品位を高め、文藝の天地を自由にし、時代の如何を論ぜず總て様式の新しいものを研究しようとするのが、その趣旨であつた。また婦女の役は女優をして當らしめ、漸次に女優養成の標的に達しようとする抱負をも有してゐた。四十年から四十一年にかけて、それが上演したものに、岡本綺堂の「阿新丸」月郊の「吉田寅次郎」シルレルの「イリニフ」及び「手習鑑」綺堂の「十津川戦記」山崎紫紅の「斐破柴田」栗島狭衣の喜劇「ひとり娘」及び「源平布引瀧」綺堂の「山井正雪」紫紅の「信玄最後」等があつた。されど、年と共に技巧は熟したにも拘はらず、全く舊劇の型を守るに忙しく、最初の期待を失ふに至つた。



文藝協會は文藝部第一回大會を三十九年の十月に開き、逍遙の譯『ベニス商人』及びその作『桐一葉』と『常闇』とを演じた。『常闇』の新様式によれる歌劇の如き、大いに世の耳目を驚かした。四十年の十二月には、杉谷代水の作『大極殿』逍遙の譯『ハムレット』の一部及び『浦島』の一部を演じた。

その他、三十九年二月には川上等が明治座でマートルリングの『モンナヴァナ』を山岸荷葉の翻譯によつて上場して、不成功に終れるがあり、三月には、白星の劇詩『釋迦』を三崎座の女優が演ぜるものがあつた。四十年には、荒川重秀、澤村宗之助によつて洋劇研究會が組織せられて、原語で沙翁作『ジュリヤス・シーザー』を演じた。

四十年に於いて劇壇に一波をあげたのは脚本改作問題であつた。さきに『都新聞』の懸賞募集の際當選した佐野天聲の作『大農』が高田藤澤、喜多村等によつて本郷座に上演せらるゝや、初めは原作のまゝに演じたけれども、後直ちに觀客に憚つて作者に改作を迫るに至つた。これについては是非の論が盛に起つた。要するに、この問題は藝術的見地に立てる作家と、一般世俗の趣味に囚へられた俳優等との相違點を明示するものであつた。これも演劇刷新が自覺の上に企てられた事を示すものと見る事が出来るよう。

脚本には天聲に『不死の誓』があつた。これも『大農』と共に社會劇の様式を帯びるものである。紫紅の作に『なつ桔梗』があつた。これは『上杉謙信』『日蓮雨乞』『左良左良越』『底倉湯』等七篇の一幕物を輯めたもの、大方は戀愛の勝利を描いて新時代の傾向を示してゐるものである。かゝる中に、イブセンの脚本も翻譯せられた。橋本青雨の譯『幽霊』千葉掬香の譯『蘇生の日』の如きはそれである。『ピネロ』も譯された。春曙の『滑濁』がそれである。ハウプトマンの作も譯された。竹風及び鏡花の『沈鐘』はそれであつた。四十一年に至つては、鷗外の翻譯の活動が始まつた。エデキンドの『出發前半時間』シュフェルの『父』などが相踵いで公にせられた。淺野憑虚、戸澤姑射の沙翁の譯も出た。『リヤ王』『御意のまゝ』『シーザー』から『騒ぎ』など篇を重ねた。『モリエール全集』も草野柴二の譯によつて出た。これ等は皆劇の新運動を鼓舞し指導しようとするものであつた。されど如何せん、時機は未だ熟さなかつた。毎日派の文士劇も解散し、文藝協會もしばらく沈黙を守つて起たない。市川左團次が松居松葉輔助の下に、松葉作の『袈裟と盛遠』を演じ、逍遙の譯の『ヴェニス商人』法廷の場を演じたけれど、效果なく、川上晋次郎が演劇革新軍を組織して明治座及び本郷座に據り、左團次、延二郎、又五郎等を糾合し、更に女優貞奴等と共に新舊の兩派から活動を始めたけれど、その努力は空しかつた。



然し二三の脚本の見るべきものはあつた。青果の『生れざりせば』の如き、天聲の『由井正雪』の如き、紫紅の『明智光秀』の如き、或は長谷川時雨が海事協會大會開演用としての懸賞に應じた『花王丸』の如きは、記憶すべきものであらう。

この趨勢は四十二年にまで及んだ。しかしながら、こゝに一縷の光明を見るに至つた。捲土重來の策は講ぜられた。今は舊俳優に對して云々すべき時ではない、新しい劇は新しい俳優によつて演ぜられねばならぬ。文藝協會はその五月に演藝研究所を開いて、演劇に關する學理と技藝を教授して、俳優の養成に努めるに至つた。これよりさきには、俳優藤澤淺次郎を主任とせる俳優養成所も起つた。俳優養成所はもとよりその規模に於いても、目的に於いても、文藝協會のそれと比較することは出来なかつたとはいへ、兎に角時運の動く所であつたことが知られる。その三月には、薰と左團次とを主幹とした自由劇場も計畫せられた。これは佛蘭西のアントアンスのテアトル・リイブルの組織を模倣したものであつた。舊い俳優がまづ素人に還つて新しい試をなさうとするのであつた。

鷗外の『一幕物』も刊行せられた。シユフェルの『猛者』ヘルマン・ボールの『短劍を持ちたる女』、『奥底』ハウプトマンの『僧房夢』ホフマンスタールの『痴人と死』ソイルドの『サロメ』、

マーテルリングの『奇蹟』ストリンドベルグの『債鬼』など、近代に於ける歐洲知名の戯曲家の作が載せられた。これによつて一幕物に關する興味を刺激せられ、新しい作家に之を試みるものも少なくなかつた。木下左太郎の『南蠻寺門前』の如き、秋田雨雀の『静劇』『記念會前夜』の如き、吉井勇の『午後三時』の如きが、それである。その他、脚本には多くの新しい試みがあつた。鷗外の『假面』は伊井荅峰一座にて上演せられた。史劇『靜』は現代語を以て史劇を取り扱つた點が世を驚かした。

逍遙の『沙翁』『ハムレット』の翻譯も世を動かした一つであつた。逍遙は幾回か稿を改め、そして従來その三四場の譯の近代語に近きを捨て、常套的の歌舞伎口調よりも寧ろ能の狂言に近い口調を取つて、ルネサンス時代の古びを附け、更にその風味、その色、その匂を出すことに努めた。その譯筆の自由なる、地口語呂の如きも皆相應すべき邦語を當てゝゐるが如き、到底他の模倣することの出来ないものがあつた。そして、相踵いで『ロミオとジュリエット』を出さうとして、まづその一部分を發表した。

逍遙はまた『浦島』及び『かぐや』姫を追つて、『新樂劇論』に於いて主張せる振事劇の詞章を出した。四十一年に出版した『金毛狐』には五篇を收めてゐる。『金毛狐』、『休禪師』、『お夏狂らん』、『初夢』、『小袖物語』がそれである。その以前にも、『俄仙人』の如きものがある。



つた。さきの『浦島』及び『かぐや姫』は所謂新樂劇に對する理想の片影とて、なかくに當時上演して成功しようとは思はれなかつた。こゝに於いてか、過渡期のものとして、作曲家の手馴らし、振附の手馴らしならしめようとして『はちかつぎ姫』以下の作をなした。即ち固有の形式をば出來得るだけ取り入れて型の保存に資せんとし、構造修辭に伴なへる缺點を除いて將來の發展に便しようとした。即ち狹斜趣味荒唐無稽を捨て、夢幻隱約の間に多少の人情の機微を寓しようとした。四十二年には『和歌の浦』の作を出した。純抒情詩式、大きな海波式、そして一段一章に象徴を有たせ、音樂には西洋樂を多く用ゐようとする試作であつた。逍遙の振事劇に對する研究は年一年歩を進めて、四十四年には『寒山拾得』、『お七吉三』、『鐘鬼』を出した。全部を畫にして、きまりきまりの位置姿勢、態度表情等を悉く名畫の筆意に擬して演じようとするものであつた。四十五年にはまた別様の試み、一種のオペラとして『墮ちたる天女』を出した。

四十二年には、如上の運動以外に、特記せねばならぬことは、自由劇場の成功であつた。その十一月、有樂座でイブセンの『ジ・ン・ガブリエル・ポルクマン』が薫の指導によつて左團次宗之助、延若等によつて演ぜられた。譯は鷗外の筆によつて成されたものである。イブセン劇の我國に於いて演ぜられたのは、これが始である。それが種々の方面に於

いて劇場に教へる所は少なくなかつた。よしやその俳優の伎倆に未だしい所はあらうが、兎に角に淋しい山のない作を豫期以上に演ずることが出來た。これが作劇家をして奮起せしめ、また舊俳優の此の舉は興行界に覺醒を促す縁となつた。

これと共に俳優養成所にも試演會が開かれた。吉井勇の『淺草觀音堂』、榎本清の『非國民』、小山内薫の譯『貧民院』等を演じた。

四十三年は、革新の機が熟した時である。すべての方面に於いて、何等かの新しさを印しないでは止むまいとする趣があつた。その一月には鷗外の『續一幕物』が出でた。さきの『一幕物』と共に、近代の劇を譯したものである。逍遙の沙翁譯に對して、これは近代の物を以て益するところが實に多大なりといはねばならぬ。抱月も亦イブセンの『人形の家』を早稲田文學に出した。これに次いで脚本の翻譯せられるものが甚だ多くあつた。シーの作、マートルリングの作、イブセンの作、ハットマンの作などが陸續として出で、逍遙の『ロミオとジュリエット』の全譯も亦出版せられた。

これを實演に於いて見る時、『桐一葉』は當時の舞臺に調和する色彩を以て舞臺に現はれ、青々國の『出雲の阿國』は舊俳優舊芝居に許された範圍に於いて新しさを加へた。自由劇場の活動は愈々盛んになつた。五月に、鷗外の譯エデキンドの『出發前半時間』及



びその創作『生田川』を出した。『生田川』は古代の傳説を現代語を以て脚色したものである。これについて、なほ薫の譯チホフの『犬』を演じた。十二月には、薫の譯ゴルキの『夜の宿』及び勇の作『夢介と僧』を演じた。

四月には、新に中村吉藏によつて新社會劇團が組織せられて、春曙の舞臺監督の下に『牧師の家』が演ぜられ十一月には、榎本清及び俳優井上正夫によつて新時代劇が起された。シーの作で、鷗外の譯『馬盜坊』チガレーの作で、清の翻譯『秋の悲』チホフの作で、河村花菱の譯『熊』が上演せられた。その他、俳優學校生徒試演會には、鼓村の作『歸農』鷗外の譯で、ヘルマン・パールの作『奥底』『砂時計』等が演ぜられ、荷風の史劇『平維盛』は左團次によつて演ぜられた。

かゝる状態にあるを以て、『劇と詩』『新思潮』『スバル』『早稻田文學』紙上には、多くの創作劇が載せられた。それらには、吉藏、勇、奎太郎、哲郎、清、楠山、正雄、雨雀、紅、綠、薫、花菱、荷風、抱月、秀雄及び鷗外等の作が多くあつた。

四十四年は前年の後をうけて、新氣運は益々動いた。新社會劇團は前年に倒れたが、新時代劇は今年に入つては、ゴッゴリの作で、正雄の譯『検査官』眞山青果の作『第一人』を出し、後に更にホフマン・スタールの作で、鷗外の譯『痴人と死』を出したが、やがてこれも解散

の厄にあつた。然し、自由劇場の活動は之を補つて餘りがあつた。六月には、長田秀雄の作『歡樂の鬼』雨雀の作『第一の曉』勇の作『河内屋與兵衛』及び鷗外の譯で、マーテルリンダの作『サントントニッスの奇蹟』を出した。十月には、鷗外の譯で、ハウプトマンの作『寂しき人々』を出した。

その他、俳優學校の試演會にては、月ごとに新脚本の上場に力め、また北村季晴が鷗外を顧問として組織せる演藝同志會は、ハウプトマンの『エルガ』を演じた。之に加へるに、我國唯一の西洋式の劇場、全然觀客主位として従來の茶屋制度を打破した帝國劇場の建築は落成して、新しい興行法は始まつた。その初演の脚本、紫紅の作『頼朝』は傑作ではなかつたが、この初興行の成行は愈々劇の新たに力強い感を抱かしめた。殊に多年の準備が成つて、こゝに雄飛しようとする文藝協會の活動こそ、目ざましいものがあつた。

二月、文藝協會は従來の方針たる一般藝術の向上、及びその社會に對する交渉の進善を期した事を改めて、専ら劇界の刷新に全力を集中する事となつた。その期する所は、劇界各方面の根本的刷新であつた。新藝術は之を時代に適應せる新脚本の薦奨と識見ある新俳優の養拔とに求め、劇界の陋風は當事者が人格の向上と組織機關の改善とによつて矯正しようとするのであつた。かくて設けられた研究所に養成せられた新



俳優は五月に至り、帝國劇場に於いて逍遙の譯「ハムレット」を演じた。日本に沙翁劇を興さうとするは確たる自信が有つてしたのである。一には劇壇の沈滞を救ふがため、二には沙翁が世界的の詩人なればとて日本に移植する事の不可能ならぬため、三には沙翁劇を日本人の解釋を以てするは世界文藝上に一の貢獻たるためであつた。上演せられた劇は成功して斯道を啓發することは實に多大なるものがあつた。九月には、その私演劇場に於て、抱月の譯でイブセンの劇「人形の家」と逍遙の作「寒山拾得」、『お七吉三』、『鉢かつぎ姫』を上演し、十一月には公演として帝國劇場に於いて『はちかつぎ』に代ふるに逍遙譯『ヴェニス商人』法廷の場を以て之を再演した。この上演はまた批評壇を賑はすところが多く、單に技藝の點のみに止まらず、『人形の家』の思想に就いて、また婦人問題に就いてさへ論ぜられた。

これより先帝國劇場には松葉の作で、ウルクマイステルの作曲せる『胡蝶の舞』が柴田環を中心として演ぜられて、こゝにも論壇はオペラ問題を以て喧しかつた。ノラの問題、また『寂しき人々』に對しての近代生活の是非の論など、皆新しい劇がいかに世間に刺戟を與へたかを示すものであつた。

この間に於いて、脚本界には二つの新しい收穫があつた。一つは雨雀の『幻影と夜曲』

であつて、一つは勇の『午後三時』であつた。『幻影と夜曲』は『權三の死』記念會の前夜、『第一の曉』、『森林と犠牲』、『市のマホメット』を載せたもの、『午後三時』は『午後三時』、『淺草觀音堂』、『夢介と僧』、『河内屋與兵衛』、『偶像』、『戲場入口半時間』、『海の子』等を收めてゐる。二者共に情調劇また氣分劇の名のもとに一括することの出来る作風である。雨雀が靜劇と稱するのも、その謂であつた。雨雀の作には之を一貫して運命觀と犠牲觀との背反並行を見ることが出来る。そこに冥想的、哲學的靜寂の境があつた。勇の作は多くは歡樂が齎し來る頽廢的氣分が現はれてゐた。たとへば『午後三時』に於いて見る浪の音、信號の赤球海鳥の悲鳴の如き、すべて死の恐怖の暗示が、夢幻的情調の中に出されてゐる。そして、前者の靜寂さに對して、これには熱烈な憧憬がある。

吉藏の社會劇に對する努力も記憶せねばならぬ。その作の多くは思想觀念を基として、その上に立たうとするイブセンの面影があるといはれた。されど、思想と現實觀察との間の距離の存するところが、その缺點であつた。従來の新派劇から新社會劇に一步を轉じようとする研究の道程に資するため特に作つたといはれる『血統』の如き、富める生みの父のもとに歸らずして、永く育てゝ呉れた養父母のもとを去らざる新思想の女性を描いてゐるが、未だ觀念に囚へられた跡が多くあつた。これ等はすべての



かれの作に通じていふ事が出来る。

四十五年の一月は季晴の演藝同志會に於いて、イブセンの作で鷗外の譯『幽霊』及びビョルソンの作で同氏の譯『手套』が演ぜられた。五月には、ズーデルマンの作で抱月の譯『故郷』が文藝協會によつて實演せられた。その思想が我が國の習慣を破り制度を毀つものがあるとして官憲の爲めに禁ぜられ、更に改訂して再び上演することゝなつた。かくて所謂マダダ問題は紛々として論ぜられた。新しい女に對する批評が、さきのノラと相俟つて起つた。六月、文藝協會は私演として、ショーの作で正雄の譯『運命の人』逍遙の作、喜劇『骨董熱』及び振事劇『歌麿と北齋』とを演じた。また演劇俱樂部はボンの作で鷗外の譯『ジオゲネスの誘惑』、テ・ホフの作で薰の譯『犬』、グレゴリーの作で花菱の『ハイヤンクス・ハルベエ』を演じた。かくの如く、新脚本は續々として場に上つた。されば、創作に當るものもすべて何等かの新しい試をなさうと企て、またそれと共に舞臺上の効果を考へて、着々完成の域に入らうとするものがあつた。氣分劇また社會劇の外、新史劇として過去の空氣の中に現代思潮の象徴を期するものも行はれて來た。鷗外の『靜』の後を襲つて現代語を以てするものも少なくなつた。

脚本の出たことも、なほ短篇の小説の如く、その數の多きがために、一々これを擧げる

事が出來ぬ。まづこゝには、空太耶の脚本集『和泉屋染物店』を一瞥して終ることゝしよう。それは新進作家の作の中の、最も進んだ部類に屬してゐた。作の人物の與へる觀念の不徹底なる事を外にしては、自由の筆致、奔放の思想、殆ど成功といふべきものがあつた。これには、『和泉屋染物店』、『温室』、『燈臺下』、『醫師ドオバンの首』、『印度王と太子』、『一人の首』等が收められてゐる。その中でも、『和泉屋染物店』と、『醫師ドオバンの首』とが、特に優秀の作である。

## 明治文學史 終







河竹新七(二代目)	三	黒岩渡香	三	柴 晋輔	三
河東碧梧桐	二六	小出 榮	二五	東海散士(柴)	二八、三九
金子薫園	一三、一四、一三三	小杉天外	二一三、二七六	澁柿園(探原)	一六、二三
川上晋次郎	一九	湖處子(宮崎)	五、九	鹽井雨江	一四〇、一四四
川上眉山	六、一三	兒玉花外	一五	春秋庵幹雄	一三
蒲原有明	五〇、一五一	後藤寅外	一四、二三		
<b>き</b>		國分青崖	三		
木下尙江	一八一	近藤芳樹	一五		
木下李太郎	二五	佐々木信綱	一七		
木村鷹太郎	一〇九	佐野天聲	二二		
岸田吟香	三三、一四	税所篤子	一五		
北田薄水	一七	齋藤綠雨	三、七		
北原白秋	三八、三三	山東京山	元		
北村透谷	一〇一	鳥 左近	一七		
<b>く</b>		鳥崎藤村	一四六、一四七、一四八、一四九、二〇〇		
草村北星	一七	鳥村抱月	一七		
國木田獨歩	五、一九				
窪田空穂	三三				
栗本鋤雲	二				

田山花袋	一三、一三三、一九七	戸川殘花	一〇三	鳴門二郎吉	三
高崎正風	一三五	土岐哀果	二三四	西村茂樹	二
高島藍泉	元	登張竹風	一六、一六九	新島 襄	三
高濱虚子	一三七、一三三、一四〇、一三五	外山正一(、山)	一〇三、一〇五、一〇七		
高安月郊	一五三、一五七、一四一	徳富蘇峰	五		
高山樗牛(林次郎)	八四、一〇九、一六九	徳富蘆花	五		
竹越三叉	五	鈍亭魯文(假名垣)	三〇		
武島羽衣	一四四	<b>な</b>			
谷口潤一郎	二二〇	中井兆民	三		
爲永春水(二世)	元	中西梅花	九		
<b>ち</b>		中村秋香	一〇		
迎塚麗水	一七六	中村春雨(吉蔵)	一七		
<b>つ</b>		中村敬字(正直)	三〇、三六		
土井晚翠	一四八、一四九	永井荷風	一八〇、二八、二九		
網島梁川	一七〇	長田幹彦	三〇		
角田竹冷	一三七	長塚 節	三三		
坪内逍遙	四五、二六三、二四五、二四六	夏目漱石	二〇八		
<b>て</b>		成嶋柳北	二四、六		



書名及件名索引

アカネ	三三	悪魔篇	三三	悪魔	三三〇	安愚樂鍋	三〇	曙新聞	二五	浅香社	二五	浅草観音堂	二四七	朝花夕花	三三六	馬酔木	一九	あそび	三六	あひびき	三六	油地獄	七	亞米利加口説ヤンレ節	三〇	あやめ會	三六	あやめ草	三七	霞酒	七	ありのすさび	二六																																
今戸心中	一三	妹背具	七	妹と背鏡	七	以良津女	六六	刺青	三〇	いろは新聞	三	浮雲	四七、五〇、五五	浮城物語	七七	浮き枕	一七	空穂歌集	三三	歌御會始	二五	歌麿と北齋	五七	うたかたの記	五七	渦	三七	埋木	七	饅且那	三三	乳母が家	一六																																
三木天遊	二七	三宅花圓	二七	三宅雪嶺	二六	箕作秋坪	三、六	水谷不倒	一七	宮崎三味	一七	村井弦齋	五	村上浪六	九	森 鴨外	五、五七、六、六	森 槐南	三	森 春濤	三	森田草平	三〇	森田思軒	五	矢崎嵯峨の舎	五、五七	矢田部長吉(尙令)	五、八七	三宅雪嶺	二七	三宅花圓	二七	矢野文雄(龍溪)	二、六、七、八七	柳川春葉	三四	柳川春三	三	山崎紫紅	二四	山路愛山	五	山田美妙齋	五、五、五、八、六、一〇〇、一一、一二、一六	與謝野晶子	一四〇、一四一	與謝野鐵幹	一三三、一三七、一三九、一四三	吉井 勇	三三	吉村新七	三	依田學海(百川)	六、六	老風堂永機	三	笠亭仙果	六	柳亭種彦(三世)	六	柳下亭種員	六	若山牧水	三三

索引

五

四



生れざりせば	三三	お七吉三	二四	女系圖	三三
運命	三三	オセロ	二六	佳人之奇遇	六、元
えゑ	三五	お千代	二六	歌道御用掛	一三
江戸櫻清水清玄	三三	お夏狂亂	二五	歌舞伎新報	一六〇
江戸城明渡	三三	おみつさん	二九	可憐狂	一三
永日	三三	於母影	二九	我樂多文庫	三
英蘭對譯字書	三八	歐洲文學の翻譯	二九	階級制度の破壊	六
遠近新聞	三三	尾上庭園	三九	閑成所	七
演藝協會	三七	乙女心	二八	海潮音	一五
演藝矯風會	三七	巳が罪	二八	海堡技師	一五
演藝研究會	三三	大河端	二九	慨世士傳	三
演藝同志會	三三	大久保彦左衛門	二九	江湖新聞	三
演劇改良會	三七	大鹽平八郎	二九	孝女白菊の歌	七
縁	一九	朧富士	二四	高野聖	二六、一六
縁の絲	三三	思ひ草	二六	かくれんぼ	七
關慶地藏	三三	思ひざめ	二六	春日局	三
おき	三三	思ひ出	二七	片蟹	一八
御歌所の設立	三三	思出の記	二七	片男波	一七
		折薔薇	二九	盤下地	一六

桂姫	二二	胡瓜圖解	三	阿新丸	二四
門	二二	牛肉と馬鈴薯	一五	車百合	三三
門三味線	七七	衣笠城	八	暮の二十八日	三
かなよみ	三五	享樂主義	二六	黒い屏	三六
假名讀賣新聞	三	伽羅枕	二六	黒裝束	一六
河内屋	二二	狂言百種	二五	黒湖	一七
河内屋與兵衛	二二	京鹿子	七〇	黒蜥蜴	一三
徹	二〇	玉琴	二二	黒眼鏡	一八
枯野の眞葛	二七	虛無黨形氣	二五	黒百合	一八
監獄署の裏	二八	霧	三九	花外詩集	一五
寒山拾得	二四	桐一葉	二五	花月雜誌	二
きぎ		近世櫻田新聞	二九	花袋集	一
野甲鶴	一六	金毛狐	二五	花柳春話	一
歸省	九	銀鈴	二四	活歴	九
貴族文學	五	くぐ		觀劇圖	一八
奇男兒	七、七五	苦界文畫	三	勤善懲惡孝子譽	三
騎馬旅行	一〇	虞美人草	三〇	勤善懲惡視機關	三
擬古派	一四	草枕	三〇	觀念小説	三
犠牲	二〇	楠木十津川	二六	歡樂	二八
窮理圖解	一九	國貞畫く	二二	歡樂の鬼	二九



けげ	二四	言文一致體	三	こがね丸	七
袈裟の盛遠	二四	元祿文學の復活	一六、一五	國學院	六
桂園派	一五	こ	一	國粹保存	二
園秀小説	二七	嘗使者	五	國粹保存主義	六
慶應義塾	一七、一八	湖上の美人	一四	國文學復興	六
組國美談	三	小桃源	一三	國民の友	五
經世偉勳	四	小鳥の巢	三二	國民新聞	五
繫思談	四	小猫	一七	心の跡	一五
鶏頭	三〇	小羊	一七	心の花	一五
藝術と實人生	一九	小弓御所	八	心の闇	六
藝術派	二〇	蝴蝶	六	此のぬし	六
狹斜小説	二三	蝴蝶の舞	五〇	コフシ	三
俠客春雨傘	一六	五重塔	七	こぼれ松葉	七
血統	二五	五人男	一六	金色夜叉	二九、三〇、三二
月世界旅行	四	五枚繪姿	七	さ	
硯友社	六、七	戀さめ	二四	小夜砧	一四
幻影と夜曲	二五	口語詩	一五、一六	西國奇談	六
現實暴露の悲哀	一八	紅茶	三九	西國立志編	三
絃聲	二四	紅塵	二〇	創作	三
言文一致	五	紅白毒饅頭	九	壯士劇	一六

五月女坂	一六	紫吟社	一九	習作	三九
酒ほがひ	三三	市井詩	三三	澁柿叢書	三三
櫻井驛遺訓	九	詩歌文章の神韻	一五七	桐草紙	五
櫻の御所	九	詩歌論	一〇一	重盛	一七
眞田幸村	一七	詩草社	三六	靜	二五
鑄刀	二七	詩人	三六	十三夜	二四
覺めたる顔	三三	詩論	一〇	十二文豪	六
醒めたる女	一七	死美人	八	鳥衛月白浪	三
ザラメヤ村長	九	自然主義	一〇、三二、五、一六、一八	霜夜鐘十字辻筈	五
山河	三三	自然主義文學	一五	象徴詩	一五
さんざ時雨	一六	自然主義の價值	一八	象徴主義	一三
三四郎	三二	自然主義的表象詩論	三五	釋迦	三三
三千里	二八	自由傳	三〇	社會主義詩集	一五
三人吉三廓初買	五	自由劇場	三三	寫實主義	四七、一六
三人妻	六	自由詩	三六	寫實主義の流行	一六
散文集	一五、二四、三九	自由の理	二	寫生文論	三〇
しじ		時代精神論	一六、一七	邪宗門	三六
史海	八	該撒奇談	四	出發前半時間	三〇、三二、三七
史劇	八	收穫	三	出處	一五
史劇論	一五	秋聲會	三九、四〇	春鶯囀	一



春夏秋冬	一三	新月	一六	新文詩	一六
春光	一八	教鞭の佳人	一八	新文明の宣傳	一五
春雪集	一五	新詩社	一九、二四	新聞紙	一三
春泥集	二三	新自然主義	一八	新聞事略	一三
春鳥集	二三	新春夏秋冬	二六	新橋夜話	二九
鍾旭	二四	新世帯	二〇	新ロマンチズム	一九
職業世襲制度の打破	六	新釋社(SSS)	九	深刻小説	一一
薔薇の使	六	新體詩	九	神祕主義	一一
食後	一〇	新體詩歌	九	心理小説	一一
抒情詩	一〇	新體詩歌集	一〇	人生派	一〇
白鷺譚	一六	新體詩鈔	一〇	す	
白羽箭	一八	新體詩選	九	水莊記	一三
調高矣洋絃一曲	九	新體梅詩鈔	九	水車小屋	一三
新色懺悔	六	新著月刊	一七	瑞西義民傳	一六
新浦島	五、一三	新日本の青年	一〇	醉沈香	一六
新樂劇論	一三	新俳優	一〇	桐野	一五
新歸朝者日記	一八	新俳句	一三	すみだ川	一五
新狂言	一七	新俳句の唱道	一〇	炭燒の煙	一三
新曲浦島	一六	新評劇曲十種	九	蕉日記	一三
新聞かくや姫	一六	新文學の覺醒期	一五		

せ	一九、二〇、三〇	西洋雜誌	二二	續一幕物	二四七
世界國盡	八	西洋事情	一九、二〇	その面影	二〇一
世界百傑傳	八	西洋藤栗毛	三〇	天打つ浪	一八三
世間師	二〇	西洋品行論	三	ゾラの自然主義	一七
生	一九	小詩國	一四	ただ	
生の芽生	三九	小説學校掃髮科	八	多情多恨	二八、二九
青海波	三三	小説神髓	七、三三、四四、五五、五五、六六	多數者	二〇
青果集	二五	小天地	一五	太政官日記	三
青々句集	三六	小天地派	一五	泰西通鑑	三
性格劇	九	小日本	二六	對獨體	三
性格劇の發展	九	昭君怨	三三	第一人	七、五
星雲時代	一五	少年の笛	三三	第一の曉	二四
清心庵	二四	少年文學	七	大學南校	二四、九
清濁	二四	關原譽凱歌	七	大農	七
精神的歐化主義	二四	雪中梅	六	塔影	二四
政談青砥碑	六	川柳點の復活	五	當世商人氣質	一五
政治小説	元	そぞ		當世書生氣質	一五
政治文學	元	蘇生の日	二四	瀧口入道	一八
政鷲馬	一五	層雲	二六	濁滑	八
靜夜	一四、一六	續春夏秋冬	二七	たけくらべ	二七

索引

一一

一〇



彌祭書屋俳句帖抄	二九	月暈日暈	二七	十津川戦記	二四
辰巳巻談	二四	月に立つ影	三三	東京繪入新聞	三
谷間の姫百合	四	筑波會	三九	東京大學の設立	一七
玉匣兩浦島	一六	土	三二	東京日々新聞	二四、六
探偵小説	八	妻	一九	東西南北	一七、一八
探偵ユーベル	天	罪と罰	八	東洋學會雜誌	六
耽溺	二〇、二四	通夜物語	一八	同志社	三
<b>ち</b>		露のよすが	二八	同人社	三〇、三六
乳兄弟	一六、一七	<b>て</b>		獨絃哀歌	一五
千代紙	三二	天才	二〇	獨歩集	一九
千代田歌集	一七	天地有情	一九	常闇	一五
地獄の花	一八	天地玄黃	一三、一四	隣之女	一八
中外新聞	三	天明調の復活	五	豊旗雲	三六
竹柏園集	一七	朝野	二四、二五	泥人形	二〇
竹柏園派	一七	織假面	八	<b>な</b>	
父と子	五	照日葵	七	内外新聞	三
長者屋	三三	照日松	一六	内地雜居未來の夢	四
女難と正直者	一九	<b>と</b>		夏草	一四
沈鐘	二四	都會趣味	三九	夏木立	一四
		豊島嵐	一〇	夏花少女	一五

なまつ桔梗	二四	日本人	天六	馬骨人言	一六
並木	一八、二〇	日本派	三九、三三	芭蕉雜談	二五、二七
情けもの	一七	日本俳句抄	三七	俳優養成所	二四
南方の花	二五	日本文學全書	六〇	俳諧秋の聲	二九
南洋大波瀾	七	日蓮記	五	俳諧史傳	二九
<b>に</b>		日蓮上人辻説法	二六	俳諧派	二〇
二家族	二〇	戦仙人	二四	俳諧論	三三
二十世紀	四	女房殺し	二三	俳書の嚆刻	二五
二人女房	七	人形の家	二七	俳人燕村	二〇
二人比丘尼色懺悔	八	<b>ね</b>		廢園	三六
尼僧	三三	寢白粉	一六	煤煙	三〇
ニイチエ主義	一八	根岸短歌會	一五	梅蕾餘薫	三
にこり江	二四	鼠小紋東君新形	三	放浪	二五
日本	六	<b>の</b>		萩桔梗	二七
日本韻文論	一〇	凌宵昇	一四	伯爵夫人	二七
日本歌學全書	六〇	昇旭朝鮮太平記	一〇	白鳥集	二五
日本國家	一五	<b>は</b>		白羊宮	三三
日本詩史	三	破戒	一四	化銀杏	一四
日本主義	三	羽拔鳥	一三	パタピア新聞	三
日本主義論	一六			はちかつぎ姫	三
				八大傳犬ノ草紙	二六

索引



八文字屋本	七	微光	二〇三	復活の曙光	一七〇
撥雲小説	八	美的生活論	一六、一七	復古夢物語	元
花紅葉	一四	樗男	一三〇	梟物語	一四
花王丸	二四	群の自休	八〇	二葉楠	一五六
母の心	三四	人耶鬼耶	八二	文使	五七
濱子	一七	一口釘	七	文の庫	一〇一
はやり唄	一六	一幕物	二四四	ブラグマチズム	一八七
春	二〇	平假名繪入新聞	二六、二八	フリードリッヒ・ニイチエ論	一六
春雨文庫	元	貧民院	二四七	フローベルの自然主義	一八七
春の夢	三〇	不言不語	二八	振事劇	二五三
萬國新聞紙	三	蒲團	一九七	文學界	一〇一
審書取調所	七	腐肉團	二七五	文學雜誌	三六
塙剛右衛門	九	蕪村調	二二五	文藝委員會	一五
ひ		笛吹川	二八	文藝革新會	一八九
悲哀の三相	一八	風葉集	二〇四	文藝協會	二四二
悲惨小説	二二	風流微塵藏	二一〇	文藝上の自然主義	一八七
非國民	二四	風流蝶花形	二一四	文明東漸史	三八
非自然主義	二九	風流佛	七、七	平凡	二〇
日の出島	三六	深見笠	八〇	平民文學	五
火の柱	三六				

平民文體	二〇	魔風戀風	一九	む	五
賦風	三〇	毎日新聞演劇團	二四一	夢幻劇論	二
別離	三三	牧の方	一五四、一五六	娘評判記	元
變自傳	三三	舞姫	五七、三二	村井長庵巧破傘	三
ほ		まひる野	三三	め	
暮笛集	一〇、一五	松蟲鈴蟲	一四	鳴雪句集	二八
牡丹燈籠	三	團々珍聞	二六、二九	猫々奇聞	三
蓬萊曲	一〇	み		目黒巷談	一三
牧師の家	二四	三日月	九	めぐりあひ	六
没理想論	九	水戸黃門	二四	明治學會雜誌	六
不如歸	二二、二七	深山の美人	一四、一六	明六雜誌	六
杏手鳥孤城落月	一五、一五	操	二四	も	
掘出し物	六	亂れ心	二六	モウバササンの自然主義	一八七
鐵案時代	三	水車	二二	朦朧派	一四、一五
翻譯時代	三	密航婦	一七	もしほ草	三
翻譯小説	一八	湊	三〇	モリエール全集	二四
本能満足論	六	明星	一五〇	文覺上人勸進帳	九
奔流	二〇	明星派	一五〇、一五五	や	
ま		都の花	六、六	夜行巡査	二
魔界天女	一四	民友社調	五		



濠虛集	二〇八	予の見神の實驗	一七〇	旅順口のヒーロー可兒大尉	一〇五
洋書取調所	一七	輿地誌略	三	歎賞談	三
洋々社談	三六	豫備兵	一五		
瘦犬	三三	横濱毎日新聞	二四三	る	
奴の小萬	八〇	吉田寅次郎	二四二	ルソフー民約論	三
寄生木	三〇七	吉野拾遺名歌譽	九〇	流轉	三
柳河風俗詩	三三	讀賣新聞	三		
山家水	二四	夜の心	一八	れ	
閑櫻	二四	夜の葉	三〇	靈鷲高千穂	一〇
閑と光	一六三	夜の舞踏	三三	冷笑	二六
閑のうづゝ	二六	顔朝	三九	冷熱	一六
閑の奴盤	三六	落日	三〇三	歴史小説	全
		落梅集	一八	歴史小説の勃興	一六
ゆ		柳橋新誌	三	戀慕流	一六
山井正雪	二四	龍潭譚	二二		
行く春	一五〇	涼炎	一八	る	
湯島詣	一八一	良人の自由	一八	路傍の花	三三
夢の華	三三			羅馬字採用	二四
				ロマンチズムの運動	一〇
				ロマンチズムの時代	一〇
餘裕派	三〇				一〇

わ			
和歌改良論	一五五		
和歌と漢詩との比較研究	一五五		
和歌論	一五五		
和歌の浦	二四六		
我海軍	一〇五		
我が輩は猫である	二〇八		
早稲田詩社	三三六		
早稲田派	二六		
早稲田文學	六		
若髮	三三		
若葉會	三四一		
若葉集	一四六		
惑星	三三三		
わかれ道	二四		
われから	二四		



昭和十年一月廿三日 印刷  
昭和十年一月廿五日 發行

明治文學史

定價金一圓七十錢

著者 永井一孝

發行所 東京市牛込區早稻田鶴卷町四三六  
竹内淳郎

印刷所 東京市牛込區早稻田鶴卷町三七一  
明正社印刷所

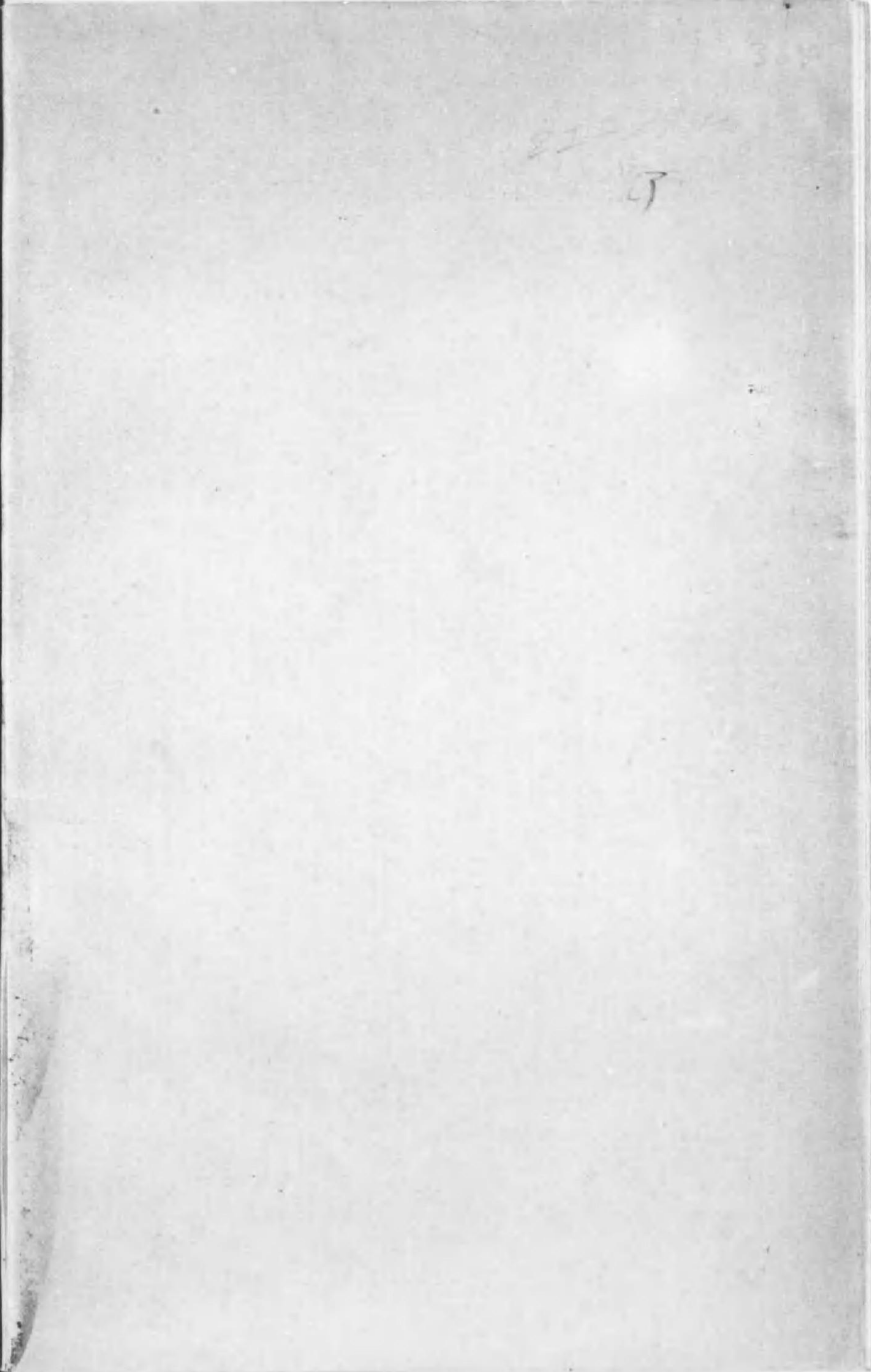
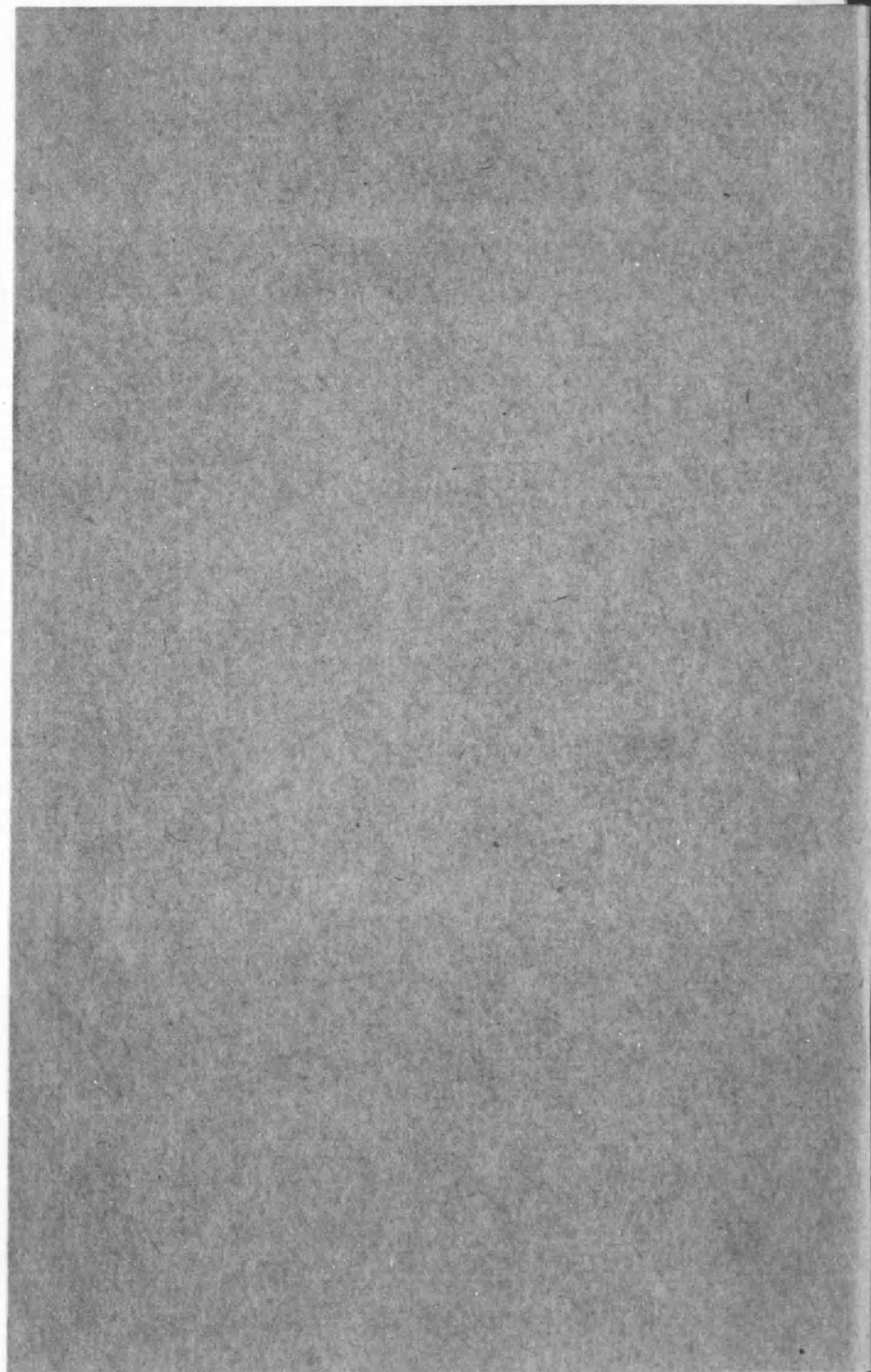


發行所

東京市牛込區早稻田大學前  
敬文堂書店

振替東京二三七七三七番  
電話牛込34)五七三五番







910.26

N 14



終